
Baby Apple

毬藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y A p p l e

【Nコード】

N 6 8 1 9 Q

【作者名】

毬藻

【あらすじ】

オレサマな高校生夏目君と、その他愉快的仲間たち…の春から秋にかけてのお話。

登場人物紹介

〈登場人物紹介〉

・夏目雅利（18）

生徒会長でもあり、新聞部部長。

表は良い子ちゃんのブリッコだが、裏は俺様で自分中心主義。先輩である桜野をライバル視している。

【生徒会メンバー】

・本田和樹（17）

生徒会副会長。長髪。

夏目と同様に、表は王子様キャラ・裏はナルシストという二重人格者。

夏目をライバル視しているが、桜野のことは崇拜している。

2

・佐竹健（17）

生徒会書記長。黒縁メガネ。

おっとりしているが、ただの天然ともいえる。少しKY。

夏目のことを崇拜している。

【新聞部メンバー】

・鴨原拓（17）

新聞部唯一の部員。

その常識人っぷりで夏目に振り回されている。

弱々しい見た目とは裏腹にケン力強い。

・望月蓮（19）

一年休学しているため、夏目と同学年ながら年上。ロピアス。

その自由人ぶりは、夏目ですら一歩引いてしまう程である。
新聞部だったようだが、休学していた間に退部扱いに。

【新聞部卒業生】

・桜野透哉（19）

前生徒会長であり、元新聞部部长。
風流才子。正義感が強い。

・川原綾乃（19）

新聞部卒業生。

桜野と付き合っていたのだが…。

・芝（19）

新聞部卒業生。

アニキ的存在で、望月の友達でもある。

1・夏目君

世の中が鮮やかに彩られているということを、僕たちが知るのは難しい。

とある私立高校。

ほのぼのとした陽気が新聞部の部室を明るく照らしていた。六人ほどが座れる大きな机が一つと、小さなロツカールーム、廃棄処分されそうになった校長室の黒革の椅子（勿論ボロボロで座ると軋みが激しい）、何故か電気ケトル。その他狭い室内に、これでもかともうでもいい物が置かれている。

その中で新聞部の部員、鴨原拓は、うとうとしながら机に向かって鉛筆を握っていた。午後四時過ぎ、窓から夕日が差し込んできて、手元に影を作っている。野球部が練習をしているのか、グラウンドからは威勢の良い掛け声が聞こえて来て、それがいい具合に眠気を誘っていた。

そこに静かに忍び寄る一つの影。

「ふあ……」

欠伸をすると同時に、ドカーンッ！と擬音が聞こえてきそうな勢いで脇腹を蹴飛ばされる。

「ぐわっ！？」

椅子がガクツと揺れて、倒れるっと思いつながらも少し宙に浮いた。油断しまくっていた状態でこの蹴りは無いだろう……数秒後、鴨原は

当然のように床に突っ伏していた。

「いたた〜…」

「鴨原あ」

ヒツと彼が顔を上げると、倒れた椅子に片足を上げて覗き込む顔がある。

「お前何も終わってねえのに、よく寝てられたなあ」

机をバンバンと叩く音が聞こえ、鴨原が恐る恐るその顔を見ると…彼が恐れていた人物が、そこにいた。

「早く、茶でも入れるよ」

ギシギシ…。

その男は、耳障りな音を立てながら黒革の椅子に腰かける。そこが彼―新聞部部長の定位置であるからだ。

「はあい…」

「あん？」

「はっ、ハイただ今〜！」

後輩が焦って緑茶のパックを用意するのを、フンツと威張り切った態度で夏目雅俊は眺める。

たった二人きりの部員。この光景が、彼ら新聞部のいつもの日常なのだ。

「つーかさあ、お前そろそろ新しい部員でも引つ張ってこいよ」

白塗りの湯飲みに口づけながら、夏目は椅子に片足を立てて後輩を見た。幼げな顔立ちだが、それとは反対に大きくて意志の強そうな瞳が真っ先に目に入る。加えて落ち着いた雰囲気とスラリとした体躯が、他の生徒たちとは比べ物にならない存在感を放っていた。

「えっ僕がですかあ？ 苦手だなあそういうの…、先輩の方がきっと影響力ありますよ」

そう言った途端、ギロリと鋭い視線に射抜かれる。鴨原は再びヒ

イツと心の中で声を上げた。

「先月で先輩たちがみんな卒業しちまったからな。お前とずっと二人って訳にもいかねえだろ」

三月までは先輩が3人もいた。それでも十分少ない方だけれど、多分この状況よりはかなりマシだ。

「う…、僕も一応頑張ってみますけど、先輩も手伝ってくださいよ」

「嫌だ。何で俺が？」

（出た出た、相変わらずの自己中っぷり…）

鴨原は心の中で呟くが、それを口に出すなんて馬鹿なことはい。い。

（そんなことしたら殺されちゃうよ…）

「大体さあ、俺は三年なんだし、俺の周りに誘いかけたって今頃部活入るヤツなんていねえだろ。それなら二年のお前が周りに宣伝してくれたほうがちょっとは可能性あるだろうが。分かる？」

無表情で淡々と話す彼は、それが至極当然だというように、目の前の後輩には何の遠慮も見せない。

「そ、そうですね。じゃ、四月になったばかりだし、一年生への宣伝は二人で…」

「断る。俺は今年、忙しーの」

「え？…何か、するんですか？」

「ニヤリ」

その問いに、文字通りそんな感じで夏目は答えた。ゾツとする。

鴨原はそれ以上聞くのを止めて、頭の中で愚痴った。

（どうせ何もしないんだろなあ。こうして僕は先輩に虐げられていくんだ…）

…と思ったら。

「こんにちは。三年の夏目雅俊と申します。えーと、三年で立候補するの、僕だけみたいなんですけど、この学校をもっと良くしていきたい、という気持ちは誰にも負けないと思っています。どうぞ宜しくお願いします！」

生徒会長に立候補していた。

ワー！！パチパチ…。

講堂に響き渡る盛大な歓声と拍手。その中で鴨原は口をアングリ開けて、壇上でニコヤカに笑う夏目を見つめた。

（な～んか見たことある人がいると思ったら、夏目先輩じゃん…。忙しいって、こういうことだったのか。ってゆうか僕何にも聞いてないんだけど！）

「鴨原、お前誰に投票する？」

すると、隣で生徒会長立候補演説を聞いていた同じクラスの山田が楽しそうに聞いてきた。

「え、僕…？う～ん…まだ決めてないなあ。山田くんは？」

「勿論、夏目さんに決まってるじゃねえかよ！見たたるあのオーラ！爽やかな笑顔！あんな素晴らしい御方他にいねえよ！」

ヤバい変な奴に聞いてしまった。テンション上がりすぎの山田を見て、鴨原はちよつと引ききみで返事をする。

「あ、そ、そう。でも同じ学年の本田くんもいいんじゃない？」

「お前分かってないな、夏目さんの素敵さを！一緒に部活だろ？票入れないと怒られるぞお！」

そう言つて山田はウインクした。

（やつぱりそうだろうか？後で夏目先輩に入れなかったって知られたら、僕は殺されてしまうだろうか？）

そんなことを考えながら、鴨原は残りの立候補者の演説を聞き流していた。

そして…。

夏目雅俊、生徒会長当選。

「夏目先輩当選だつて〜！」

「当然じゃない、他に誰がいるのよ？」

「そうなんだけど〜！でも本当先輩つて素敵よね〜」

「夏目さんつてさ、家も金持ちで勉強も学年トップ。しかも態度も言葉遣いもすつごく丁寧で、正に生徒会長に適任つて感じたよな」

「分かる！それで顔はちよつと童顔で可愛いんだけど、頼れるところもあつたりしてカッコいいの〜！全ての魅力を併せ持つてるつて感じ！？」

「珍しいよなあ、男女ともに好かれるなんて…」

コンコンツ、と新聞部室のドアが叩かれた。夏目が出ていくと、キャアツと女の子三人組が声を上げる。

「どうしたの？」

「あつあの、夏目くん、当選おめでとう！これ、良かったら、受け取ってくれる？」

三人の中で一番派手であろう女子が照れながら花束を差し出した。
「ああ、ありがとう、キレイだね」

控えめなスマイルで、夏目は彼女たちに微笑みかける。その瞬間後ろにいた女子がクラリとよろけた。

「ちよつと、ユカ！」

「あのね、私たちと同じ生徒会メンバーなの。だから何か困ったことがあつたら、遠慮せずどんどん言つてね」

センターの女子は頬を赤らめながら、夏目の顔を見て可愛らしく笑つた。

「助かるよ。それなら俺も安心だね」

「ま、まかせて！私たちも頑張るから！…あつ、ゴメンね部活中だ

ったのにつ…また生徒会でね!!」

言いたい事だけ伝えると、三人組はキヤアキヤアと逃げるようにそこから去って行ってしまった。

部室内まで聞こえてくるその甲高い声に、鴨原はドキドキしながら夏目の様子を窺う。ガチャンツと扉が閉まったと同時に、

「ハーツ、かつたりいッ」

バサリと花束が床に散乱した。

(何と言っても二重人格…!!)

途端に真顔になった夏目を見ながら、この花束どうするんだろうとか、あの女の子たち可哀そうだなとか、鴨原の頭の中は色んなことが巡っていた。

「鴨原、それ、捨てといってくれる?」

(やっぱりね!)

ギシギシといつものように音を立てながら、夏目は定位置の椅子に腰かける。

(こんな先輩と二人きりなんて、絶対無理だ…。はやく部員探さないと!!)

埃の被った花瓶に花束を生けながら、鴨原はそう心の中で決意するのだった。

2・本田君

新聞部部室。

パーティー開きにされたポテトチップスがどんどん減っていく。それは決して二人の部員が仲良く食べているわけではなくて、部長である夏目雅俊が一方的にバリバリ食べているだけであつた。

「先輩、ビックリしましたよ。まさか生徒会長なんて！」

「そうか？まあいいじゃねえか。ステータスがあつて」

サラリと放たれた言葉に、鴨原は思わずペンを止める。

「まさか先輩そんな理由で……？」

「悪いの？」

「い、いや、全く……」

と言いつつも、それってどーなんだよ！と鴨原は心の中で呟く。

「あ、先輩まさか部活までは辞めたりしないですよ……ね？」

「ああ。どーしよっかなあ」

塩のついた指を、夏目はゆっくりと舐めながら目の前の顔を覗き見た。

「ええっ、それは勘弁してくださいよ。僕だけになったらココ廃部ですよ」

「バーカ。辞めるわけねえだろ。部長なんて美味しい地位、そうそう貰えないし」

「ま、また不純な動機で……」

思わず突っ込みたくなつたが、何とか我慢した。きっとこの人には何を言つたつて無駄だ。

「で、先輩！今年度の生徒会メンバーも出そろつたわけですし、四月号は特集ですね！」

毎年の習慣で、この時期の新聞部の仕事は新生徒会メンバーを紹介する記事と決まっている。鴨原は気合を入れてペンを握つた。

「そうだな……メンドクせーけど、とりあえず一人一人に取材しない

とな。写真も撮って…」

「あつそれですね、先輩！」
「すかさず鴨原が手を上げる。」

「何だよ」

「トップ写真は、是非！生徒会長と副会長のツーショット写真にしたいのですが！」

「はあ？何で」

不満げな顔をした夏目に、鴨原は怯まず笑顔で言った。

「知らないんですか？今年は生徒会長が夏目先輩、副会長が本田くんっていう超人気、ゴールデンコンビで有名なんですよ！この二人の写真を撮れば、きっと新聞部も話題になって、部員も…ムフフ」

鴨原は思わずニヤけた。この記事が上手くいけばきっと誰もが得をする筈だ。

「本田って？」

「ええっ、先輩知らないんですかあ！？」

声を上げた途端、うるせえ、と机の下で足を蹴られた。

「いてっ…先輩、演説の時見たでしょ。先輩の後に話してた…」

「あゝ、何か長髪のヤツがいたかもしれねえけど、印象薄くて覚えてねえな」

（印象薄いつて…）

鴨原は呆れながらも感心した。あんな目立つ人をそんな風に言うてのけるとは、やっぱり大物だ。

「本田くんは、僕たち二年生の間で一番の有名人なんですよ。甘いマスクが女の子にモテモテで、外人みたいなんです。でもそれだけじゃなくて、頭も良いし、運動も出来るし、ホント住む世界が違うっていうか…羨ましい限りですよ！」

はあ〜と鴨原が溜息をつく隣で、夏目はフーンと呟いた。

「なるほどねえ」

「あ、興味持ちました？」

「怪しいな」

「え？」

ポカンと鴨原が夏目を見ると、夏目は相変わらずポテチを口に運ぶ手を止めずに、むしゃむしゃと食べ続けている。

「な、何がですか」

「そういう完璧なヤツって、怪しいぜ。絶対、何か裏があるハズだ」
彼はそう、言い切った。

「え、ええ？先輩、自分がそうだからって、他人まで巻き添えに……」

ドカーンッ！！

机の下の子。今度は容赦なく、向かいに座っていた後輩を突き飛ばした。

「ウワー！ごめんなさいー！！」

2年C組。

午後五時を過ぎて、教室はすっかり暗く寂しい影を落としている。締め切った扉の向こう側も人が通る気配はなく、ただユラユラと暗闇が広がっているだけだ。

「クソッ、なんでアイツが……！」

ゴンッ！と机を叩く音が鈍く響いた。俯いた拍子に、肩まである長い髪がサラリと滑り落ちる。それでも綺麗に揺れながら、毛先は軽く内側を向いた。

「まあまあ、本田、落ちつけよ。……でもまあ、俺らもまさか三年で立候補するとは思わなかったな」

「そうだよ。一年の奴らは誰が良いとか分かんねえだろうから、適当に三年の方に票入れた奴多そうだけど、それでも大して票差なかったぞ」

机を取り囲んで鈴木と高橋がそう言ったけれど、本田和樹の怒りは全く収まらなかった。

「何だよ！何で俺があんな奴に負けなきゃならないんだっ！全然納得できないっ！！」

思わずガタンツと立ち上がると、その拍子に椅子が後ろにひっくり返った。

大きな音が教室内に響き渡る。

「おいおい落ち着けて！」

「本田ア！」

ハアハアと肩で息をしながら、彼は呼吸を整えた。

（有り得ない…、なんで…）

「あんな奴の下で働けて…」

ポツリと呟く。シヨックで今度は力が抜けてきた。

「ま、まあでもさ、話してみると、結構良い人かもよ？ホラお前、直接夏目先輩とは話したことないんだろ？」

「そうだな、見た感じ優しそうだし、案外仲良くできるんじゃない？」

「お前ら俺を裏切るのかあっ！」

再び怒りに火がついた本田に、焦った二人は急いで発言を取り繕った。

「ああっ違うよ！そんなわけねーじゃん！絶対あの人やな奴だよ、顔に出てる！」

「あつ俺もソレ思ってた〜！気が合うな〜！本田、お前もだろ！」

「その通りだ！お前らよく分かってるじゃないか！」

二人はそんな会話を続けながら、何とか本田の平静を取り戻した。真っ暗になった教室でコソコソと話し合う。

「そつえばさ、明日って、新生徒会メンバーの初集合あるんだろ？」

「ああ、そうそう。生徒会の奴に聞いたよ。本田も行くんだろ」

「まあね。俺が主役じゃない集会なんて、めんどくさいだけだけど、とりあえず初回は大事だからね」

そつ言いながら、明日は派手に髪でも結っていこうかなあ、などと考える。

「でさ、何か新聞部の取材とかもあるって聞いたぞ。夏目先輩って新聞部らしいじゃん？先輩がすんのかな？」

途端に本田の眉間に皺がグイツと寄った。何かを考えるように、低く呟く。

「新聞部の取材…、ねえ…」

3・ライバル？

六時間目の授業が終わり、校内はザワザワと活気を取り戻していた。生徒たちが走り回る靴音、掃除時間を告げる校内放送、先生の叫び声…。

第一校舎、一階の廊下を真っ直ぐ進んだ突き当たりに、生徒会室がある。そこだけは、校内の喧騒とはかけ離れて静かだった。教室の周辺は、先生たちの会議室であつたり事務室であつたり、特別な用事が無ければまず生徒が来ることは無い場所だからだ。

その生徒会室の扉を開いてみると、中には十数人の生徒が思い思いの場所に座つて新生徒会長の話を聞いている。

「改めて、はじめまして。生徒会長に選ばれた三年の夏目です。えーと、去年から生徒会メンバーだった人は俺の事を知っているかと思いますが、初めての人はあまり緊張せず、分からないことがあれば気軽に聞いてくださいね」

夏目が話をしている間、他の生徒たちは皆真剣に耳を澄ましていた。

「それで早速なんですけど、今日は俺の部活でもある新聞部から生徒会メンバーへ取材があるので、嫌がらないで受けてくれると嬉しいです。もう少ししたら俺の後輩の鴨原くんが呼びに来てくれる筈なので、それまでは皆しばらく自由にしててくださいね」

夏目がそう言うと、次第にメンバー同士挨拶しあつたり、他愛もない会話が始まつたりで教室内の緊張した空気が途切れた。

「なっ、夏目くんって、新聞部部長なんでしょ？もしかして一緒に取材に来たりするの？」

その中で見たことのある三人組の女子のセンターが、顔を赤らめながら夏目に話しかけた。

「ああ、そうだね…。全員とまではいかないけど、時間あつたら顔出しちゃおうかな」

ニツコリと微笑む。

「イヤン」

「ちよつと、レナ!!」

今度はセンターがよけた所で、後ろの二人が支えながら彼女の体を揺さぶった。その間に一人の生徒がツカツカと夏目に近づく。

「夏目さあん! 僕、佐竹健は、今年生徒会書記長に任命されました
」

「ケン、今年もよろしくね。それに俺の後を継いでくれて嬉しいよ
黒縁メガネに、綺麗にワックスで固めたツンツンヘアー。夏目よ
り一つ下の二年の彼は、そう言われて更にニンマリと笑顔を深めた。
「はい! 僕絶対に夏目さんの後を継ごうと思っていたので、無事に
その役目を貰えてラッキーです! それに夏目さんが生徒会長だなん
て…。もう夢のようですよ」

佐竹は目がハートだった。

「ありがとう。じゃあ来年はケンが生徒会長だネ。期待してるよ」
バチツと夏目がウインクを飛ばすと、佐竹はニヤニヤが止まらな
くて倒れそうだった。

「夏目さん…」

「あれ、ケン、鼻血…」

そんな夏目と佐竹のやり取りを見ながら、他のメンバーたちはコ
ソコソと話し合う。

「なあ、なんでケンってあんなに夏目さんと仲良いの?」

「あーそれ思ってたー! ズルいよね! なんでー?」

「しかも名前呼び捨てだよ! 私マジ呼ばれたいつ、レナって」

「お前は無理だよ」

「はあ!? 何だよ!」

「よーし、じゃあ今から俺が話しかけこようかなあ」

「ちよつと待って、じゃああたしが!」

「いや私が!」

騒がしくなっていく教室を眺めながら、本田はイライラとした気持ちを持ちを落ち付かせようと目を瞑った。

（何だコレは。何でもみんなあいつばかりで、俺を無視するんだ！）
夏目がいても、彼は自分が一番だと思っている。勉強も、容姿も、運動も、何も負けていない筈だ。なのにこの有様は何だよ？

「本田くん、どうしたの？」

突然の声にドキリとして目を開けると、心配そうな顔をした二人の女子が目に入った。

「え？ああ、何でもないよ。最近ちよつと疲れてるのかなあ」

そうはぐらかすと、大丈夫？と更に心配そうな顔をされる。

（メンドクサイな…。ま、悪い気はしないけど）

そんなことを思いながら、彼は「大丈夫だよ」と飛びっきりの笑顔を披露した。

「そ、それならいいの！…あつ、本田くん、昨日の演説すつごく良かったよ！」

「え？」

「私実は、本田くんが会長になったらいいなって思ってたのよね、へへ」

「私も！…だって同じ二年としては、本田くん以外考えられないっていうか」

「そうそう、それに、普通は前年度の生徒会メンバーから選ばれるじゃない？でも本田くんは何のコネもなくここまで票取っちゃうなんて…こんなことまず無いわ！」

「そうよねえ！と目の前で盛り上がりだす二人の女子をぼんやりと眺めながら、本田は少しずつ元気を取り戻していた。

（やっぱり、俺だって負けてない！こうやって応援してくれる女の子たちがいるんだ…見てろよ、夏目雅俊…！！）

頭の中でそう宣言してバツと夏目を振り返ると、既に彼は他の生徒会メンバーにすっかり埋もれて、姿を確認することすら出来なかった。

（ク、クソーツ）

クラリとよろけた本田を、二人の女子が慌てて受け止める。

4・本田君と鴨原君

生徒会室から少し離れて、同じように静けさを保っている会議室。生徒会副会長の取材のために、鴨原は誰もいない廊下を早足で歩いていた。

（まったく、夏目先輩がトップバッターだったのに、メンドくさいから明日にしるだなんて…）

本当に勝手だ。自分の部活だからって何をしてもいいと思っているのだろうか。急遽順番を入れ替えて、副会長から始める事になってしまった。

（本田くん、もう来てるかな…）

会議室の前で深呼吸をし、ゆっくり扉を開ける。

（わっ、いた！）

コの字型に並べられた机の一番前の席。ゆつたりと座っている、彼と目が合う。

「あ、本田くんはじめまして！新聞部の鴨原です！遅くなってすみません」

焦ってそう言うと、本田は屈託の無い笑顔で、大丈夫だよ、と優しく告げた。その拍子に肩まであるサラサラの長い髪が綺麗に纏まって揺れる。

（ああ、良い人そうで良かったあ）

心の中でホッと一息ついて、鴨原は本田の隣に腰掛けた。ノートとシャーペンを取り出し、早速話を始める。

「じゃあ今から本田くんのこと、色々聞かせてもらいますね！あ、答えたくないこととかあれば、遠慮なく言ってください。って、そんな変な質問は無いと思いますけど…」

「うん、分かった。俺も出来るだけ答えるようにするから、何でも聞いてね」

ニッコリ。

その笑顔を見て、思わず鴨原はドキドキとした。

（うわあ、やっぱり本田くんって綺麗な顔してるなあ…。そりゃ女の子にモテるわけだよ）

そんな事を考えながら、簡単な質問をする。誕生日、血液型、趣味、特技…。

他の生徒会員にはそこまで詳しく聞かないが、生徒会長・副会長は校内でもかなり目立つ存在だ。それなりに人気があり、ファンクラブも存在する。だから、彼らのプロフィールを詳しく載せて紹介する記事を作れば結構な需要になるのだ。

「じゃあ次の質問。本田くんは、どうして生徒会長に立候補したんですか？」

メモの通り、書いてあった質問を読み上げる。

「ああ、それは。前生徒会長に憧れていたからだよ」

スラリとした指を口元に当てて、本田は微笑んだ。その姿はまるで、モデル誌の一場面を切り取ったように美しい。

「前って…、桜野先輩ですか？」

「そう。もう卒業しちゃったんだけど…、入学した時からずっと憧れててね。俺も、先輩みたいに何もかも完璧な人間になりたいって思ってたんだ」

「へえ…」

夏目や本田と同じように、校内で有名だった人物。

「本田くんの目標の人は桜野先輩だったんですね！ああでも僕としては、もう本田くんも同じくらい完璧な人だから、先輩にも十分追いついてると思いますよ！」

本心からそう告げる。

「ありがとう。…あ、今の、鴨原くんに初めて言っちゃったな。ちよつと恥ずかしいなあ」

そう言って頬を赤らめる本田を見て、鴨原は心の中で小躍りした。（コレは良いネタになりそうだな、本田くんファンは喜ぶぞ）
頭の中で自分の書いた新聞が引っぱ張りだこになる場面を想像し、

自然と鴨原はニヤける。そんな彼を内心冷やかに見つめながら、本田は笑顔で尋ねた。

「ねえ、鴨原くん。そういえばキミ、夏目先輩の後輩だよね？あの人って、どんな人？」

唐突に話が変わって、鴨原はハツと顔を引き締めた。

「え、夏目先輩ですか？うーん、どんな人って…、あんまり詳しくないしなあ…」

「そうなの？だって部活二人きりでしょ、仲良くないの？」

（仲良いなんてアリエナイな…）

頭の中でそう突っ込みながらも、鴨原は笑って誤魔化した。

「何て言うか、先輩と僕とは立場が違うので…。でも、色んな意味で凄い人ですよ」

「凄いつて、どんな風に？」

ズイズイと顔を近づけられ、再びドギマギする。

「え、ええと…。何でもできるっていうのは、見てて分かると思うんですけど。その他にも、おっとりしている様で自分の意見はしっかり持っているんです。今回だって会長に立候補するなんて僕聞いてなかったし、自分一人でどんどんつき進んでいっちゃうっていうか…」

「へえ…？何か、イメージと違うなあ…」

耳元でそう呟かれた声に、彼はドキリとした。

（ゲッ…、もしかして、変な事言ったかな…）

鴨原はいつも自己中心的な夏目雅俊しか見ていないので、外面の良い夏目の印象を崩してしまったかもしれない。そうすると後々本人に何を言われるか分からないし、面倒なことになってしまう。

「あ、でも凄く優しくして…」

「やっぱりねえ」

フォローの言葉を途中で遮って、本田が鴨原を見た。ニヤリツ。「思った通り。君は先輩のこと、詳しく知ってると思ったんだあ」女子からは『王子様のような笑顔』と言われている本田の顔が、

鴨原には『悪魔のような笑顔』に見えた。

「ほ…、本田、くん？」

「ねえ、教えてよ。君なら知ってるでしょ、アイツの弱点」

「あ、アイツって…」

今までの柔らかな空気を全て捨て去って、彼は冷たい視線で鴨原を見つめている。こんなにも一瞬で人の雰囲気って変わってしまうんだなあ…と、鴨原は驚きすぎて逆に冷静だった。

「そんな事知って…、どうするの…？」

「潰すよ」

シレッと、彼は答える。

（ヒーツ、夏目先輩、超ビンゴ！！）

鴨原はつい先日言われた夏目の言葉を思い出していた。

『そういう完璧な奴って、怪しいぜ』

本当に裏があつたとは。もうこの世界には芯から心優しい人なんて存在しないんじゃないかと鴨原は思う。

「鴨原くん…、君には教えといてあげるよ」

（聞きたくない！）

そんな鴨原の心の声も虚しく、本田は机に肘をついて勝手に語り始めた。

「そう、あれは一年前…。校内で『恋人にしたいナンバーワン』

という企画があつたのを覚えてる？俺は自分が最高である自信があつた。それなのに…、結果は三位だ。一位は桜野先輩…それは良い！しかし二位が」

「あ、夏目先輩」

「そうっ！何でアイツなんだっ！！あんな童顔のブリツ子野郎のどこがいいんだ！あの時俺はショックで一週間学校を休んだぐらいだ。理由を考えた…絶対に俺の方が男らしいし、見た目だってイケメンだ。じゃあ何故か？そこで閃いた…金だ！あいつの家は金持ちだから、裏で金が動いて…」

ブツブツブツブツ。

割って入ることもできず、呆然と鴨原は彼を見つめていた。もう何を聞こうとしていたかも忘れてしまつて、このまま教室を出て行くのかなあという思いが頭をよぎる。

「で、鴨原くん。早く教えてよ」

再び鋭い視線を向けられ、ギクリとした。

「そ、そんなの知らないよ……」

「嘘つかないでよ。さっきあんなにアイツのこと知った風に喋ったじゃない。ホラ、何でも良いから言つてみなよ」

（夏目先輩の弱点、夏目先輩の弱点……）

鴨原は頭の中で必死に色んな事を巡らせてみたが、一向に思いつかない。

（大体そんなモノあるのか？あつたら僕の方が知りたいよっ）

「……っ、やっぱり無理だっ、思いつかない！」

その言葉を発すると同時に、目の前の手にグイッと胸倉を掴まれた。

「ウツ！？」

「じゃあ力づくで聞くしかないかなあ」

本田の澄んだ瞳がキラリと輝いた。

5・仲良くしましょう

「本田くん！冗談はこの辺にして…」

「うるさい！」

胸倉を掴んだ手で思いつき突き飛ばされた。ガタタンツと机がズレて、椅子がひっくり返った。

「鴨原クン、君絶対に何か知ってるよね？目が泳いでるよ？…遠慮せずに、言っちゃいなよ。言ったらスッキリするよ？」

倒れ込んだ鴨原を上から静かに見下ろして、本田はニヤニヤと笑っている。

（本気の目だ…）

鴨原はボーツとする頭を起こしながら、頭の中で警告を鳴らした。

（ヤバいな）

「何黙ってたんだよ、言えつつつてんだよ！！」

すかさず腹目がけて蹴りが飛んでくる。

「っ！」

「オラッ！」

二発、三発。

続けて蹴る。鴨原は俯いたまま顔を上げず、ゲホツ、と咳込んだ。

「アレ、もうヤバい感じ？意識失っちゃった？」

本田がアハハ、と声を上げる。…その瞬間、目の前の影が動いた。
「？」

気が付けば足元には誰もおらず、同時に、ズッシリと本田の肩に重み加わる。

「ハア、ハア、ちょっと、キツいなあ。体動かしてないと、ダメだね…」

「な、え？鴨原クン、いつの間に？」

ポカンとしている本田を余所に、鴨原は彼の背中をガッシリと羽交い締めにして耳元で囁いた。

「本田くん、悪いんだけど、勘弁してくれるかな？僕も、我慢できない」

（なんて、力だよ…）

本田は自分の身に何が起こっているのか、未だに理解しきれなかった。さっきまで目の前で転がっていたヤツが、どうして今俺の後ろにいる？…頭が混乱する、ただ、危機感だけは強く感じる。

「こんな事して、タダで済むと…」

突然ガラガラツと音がして、教室の扉が開いた。二人がハツとして入口を見ると、無表情の夏目が堂々とそこに突っ立っている。そのままピシャンツと扉を閉めると、夏目は何事も無かったかのように時計を指さして鴨原に告げた。

「取材の時間早くしてくれてクレーム、俺のトコに来てんだけど」
三人が固まってお互いの顔を見合わせている。その時間はせいぜい五秒ぐらいだけれど、彼らには一分程の時間があつたように思えた。

「ほ、ホントですか！すみません、今から行きます！」

パツと鴨原が手を離し、ノートを片付け始める。本田はぼんやりとその光景を見つめていたが、ハツと気付いて夏目に近寄った。

「せ、先輩、今の見たでしょ！鴨原くんが、俺に暴力振るって…、
どういう事ですか！」

そんな必死な彼を見て、生徒会長は無表情のままキツパリと言つてのけた。

「お前も他人の弱点なんざ探ってねえでちつとは自分で努力でもしろよ。そんなんで俺に勝とうなんて、一億年早いんだよバーカ！」
本田の頭の中で、ピシリツと稲妻が走った。

（アレ…、この人、こんな性格悪かったっけ…？）

目の前では夏目がフンツと威張った顔をして、その横で鴨原は大丈夫？という顔をしている。

（コイツら…、一体何なんだよ…）

イライラとも悔しさともつかぬ思いが本田の胸中で渦巻いていた。思わず笑いたくなる衝動を何とか堪え、静かに尋ねる。

「…先輩、そんな事言って良いんですか？俺がみんなに先輩の本姓バラしたら、どうなると思います？」

出来る限り冷静に。そう頭の中で心掛けたのに、思わず声が震えてしまう。

「そんなの、お互い様じゃねーか。大体お前が鴨原殴った方が、よっぽど大事だぞ。下手したら停学。それにお前がそんなこと言っても、みんなそんなヤツのこと信じるかな？多分俺の言う事、信じるだろうなあ」

楽しそうに夏目は笑った。

（こ、コイツ…！！）

「あ、そうだ」

爆発しそうなぐらい顔が真っ赤になっている本田に手をかけて、

夏目は冷静に告げる。

「お前、明日から俺の犬だからな。俺の言う事ちゃんと聞くんだぞ。そしたらお前もちょっとは使えるようになるだろうし、みんなからも良く働く副会長だなくって株も上がる。一石二鳥。いいね」

「はあ！？何だよソレ！誰がそんな事」

「言う事聞かないなら、お前の本性バラすぞ。そんなもって、生徒会からも追放。オッケー？」

夏目の顔は笑顔なのに、目は全然笑っていないかった。その見開いた瞳が、本田の言葉を飲み込んでいく。

（クソ…、何でこんなことになったんだ。これじゃただの職権乱用じゃないか…）

スタスタと教室を出ていく夏目の後姿に悪態をつきながらも、既に本田は抵抗する気力を失っていた。

翌朝。

「本田くんおはよー」

「おはよう」

「キヤー、おはようございます先輩っ」

「おはよう」

通り過ぎる女子たちが頬を赤らめながら本田を見つめている。その視線を感じながら、彼は生徒会室へと急いだ。

（朝のミーティングなんて面倒だな…）

扉を開けると、もう既に数人のメンバーが集まって雑談している。

「本田くんおはよー」

機械のようにお馴染みの笑顔を向けて、本田は数人に挨拶した。

「おはよう」

「あ、カズ！」

突然下の名前で呼ばれて、本田の体はピクリと固まった。

「おはよう！今日はカズが校門での挨拶当番だったよね、お疲れさま！やっぱりカズは評判良いね、みんな朝から気分良さそうだったよ」

ぐるりと振り返れば、夏目が綺麗に仮面を被ってノホホンと笑っている。

（カズ…！？）

言葉を発する事もできず口をパクパクしている本田を無視して、他の生徒会メンバー達は、

「アレ、本田くんって、夏目先輩に名前で呼ばれてたっけ？」

「いつの間に仲良くなったんだよスリー」

「いいなあ。やっぱりイケメン同士、気が合うのかもねえ」

等々、口々に勝手なことを言い合っている。

「じゃあ、また後でね！」

そう爽やかに生徒会長の机に向かう夏目を見て、思わず「あ、あのっ」と呼びとめたが、その声は小さすぎて周囲にかき消されてしまった。

(ど、どーいうつもりだよ…)

「ねえ」

後ろから聞こえた声にドキツとして振り向くと、黒縁メガネにツンツンヘアーの男がジローツと本田を見つめている。

「な、何」

「君、カズって呼ばれてたよね？」

「う、うん」

「そうかぁ。君も知っちゃったかぁ、夏目先輩の秘密を…」

そう言つて彼は「仲良くしようね」とニッコリ笑つて目の前を通り過ぎていった。

「ちよ、ちよつと、君、佐竹クンだよな？それ、どういうこと、ねえ…」

一人オロオロとする本田に構わず、生徒会室は賑やかな声で溢れていた。

6・午後の昼下がり

今日も新聞部室では、二人の部員が机に向かってオヤツの時間を楽しんでいた。机にはポッキーとチョコレート、そして二リットルのコーラがガッツリと存在感を発揮している。

鴨原は一口もお菓子を口にしていなかったのだが、今日はそんなことなどどうでも良かった。完成した新聞がかなりの出来で気分上々だったからだ。

出来上がった4月号の校内新聞は、校舎の五ヶ所に設置された閲覧棚に置かれている。量はいつもより多めに刷ったはずだが、それでも昼休みには女子たちの手によってあっという間に無くなってしまった。

「はあ、こんなに皆が僕の新聞を読んでもくれるなんて、幸せです…」

記念に取っておいた新聞を手に、鴨原は生徒会長と副会長がツーショットで映っている写真をウツトリとした表情で眺めた。さながら彼らのファンクラブ会員のように。

「まあ、俺のお陰だけだな」

ポッキーをくわえながら、夏目がジロリと後輩を見る。

「ハイ！夏目先輩サマサマですっ」

嫌味な先輩の言葉も今日は気にならない。だって本当に彼ら二人のお陰で、大勢の人に見てもらえたのだから。

「見てください、いゝ写真ですよ！」

「ああ、そうだな。カズ、笑えてねえけど…」

突然部室の扉がノックされ、こちらが反応する間もなくガチャツと扉が開いた。彼は、ほんの小さな隙間から室内に滑り込んで、後ろ手でシッカリと扉を閉める。

「こんにちは、先輩！今日も素敵ですね！」

ワザとらしい笑顔で本田が挨拶をした。夏目がくわえていたポッ

キーを噛み落とす。

「あ、鴨原くん！この前はゴメンね。俺も反省してさ、あれから真面目になったんだ。ああ、そんなことより、そう、新聞！凄い人気じゃない！まあ、俺のお陰だと思っただけで！でさっ」

二人の冷めた視線を無視して、本田は入口の前に突っ立ったまま髪をかき上げた。

「俺の特集、組んでよ！絶対、イケると思うんだよね。俺だけだからさあ、フアンの子たちも超レアだって何枚も貰ってくれ…ブフッ」

「夏目先輩！記事超最高でしたあっ！僕30枚頂いて、親戚に配ります！！」

部室のドアが丁度良いタイミングで開き、思いつき本田に直撃した。鈍い感覚に不思議そうな顔をした佐竹を、夏目と鴨原が親指を立てて合図する。

グッジョブ。

「アレ、カズ居たんだ？どうしたの？」

「どうしたじゃないっ！っ！何か何気にお前も名前と呼んでんなっ」

ハアハアと殺気立つ本田を余所に、佐竹はニコニコと机に近づいてポツキーを摘んだ。

「鴨っちやるじゃん、最高！」

「あはは、ありがと佐竹くん…」

鴨原は内心ヒヤヒヤしながら返事をしたが、夏目は何も言わずポツキーに食いついていた。

（佐竹くんは、なぜか裏の夏目先輩に対しても物怖じしないんだよねあ）

いつも鴨原は不思議に感じるが、佐竹の自由な雰囲気それを許しているのかもしれないな、と思う。

「…で、どう、鴨原くん、俺の記事…？」

痛みを堪えながら尋ねてくる本田に、まだ言うか、と頭の中で突っ込みながらも、鴨原は少し考えてみた。

「うーん」

「カズの記事、ねえ…」

真面目な顔で口元のポツキーを上下させながら、夏目が本田の頭から足元までをジックリとスキャンする。

「えっ、先輩！考えてくれるんですか！」

「あはは、夏目さんの特集じゃなくて、カズの？そんなの無理に決まってるじゃん」

流れを無視して、ヘラヘラと佐竹が笑った。

「キミに聞いてないよ…」

「無理、だつてさ」

夏目が笑いを堪えるように顔を背けた。

「笑ってるし！」

「カズ、残念でした」

「誰のせいだよっ！」

そんな下らない言い合いをひとしきりした後、夏目がああ、と思いつ出したように鴨原に向かって告げる。

「そういえば来週、新聞部のOB三人とも、来るみたいだぞ」

「えっ、そうなんですか？」

思わず鴨原は壁に掛けてあるカレンダーに目を移した。来週は…
ゴールデンウィークだ。

「大学入って忙しかったみたいだけど、休みだし久しぶりに部室に顔出すって」

「うわあ、絶対行きます！先輩達変わってないといいな…」

「新聞部の先輩って…、もしかして桜野先輩？」

キラリと瞳を輝かせて、本田が話に割り込んできた。

「そうだよ、去年は新聞部の部長だったんだ。ああ、そう言えば本田くんは、桜野先輩が憧れの人だったよね」

「へえ、そーなんだ？」

夏目が意外そうに、少しだけ目を見開く。

「先輩、記事の内容見てないんですね…、自分の部活なのに…。ま

あ、そうです。そつかあ、来週来るんだあ、桜野先輩……」

モジモジと何か言いたそうにしている本田を見て、鴨原は可哀そうになりつい声をかけてしまった。

「あの、桜野先輩に会いたかったら、本田くんも来週部活来る？変な事とか言わなければ、別に……」

「本当っ！？鴨原クン、君やつぱり最高だね！俺の次に良い男だよ、ウン！じゃあ来週は喜んで、新聞部にお邪魔させてもらっね！」

途端に元気になる本田の横で、鴨原は夏目の鋭い視線をビッシリと浴びた。

「う…、まあ、ちよつとは人もいた方が賑やかですし……」

「そう？じゃあ僕も行こうかなあ！僕は生徒会で桜野先輩の後輩だったし、一応覚えてくれてるかもしれないしねえ。あゝ楽しみだなあゝ」

（佐竹くん…、夏目先輩の視線に気づいてよ…）

テンションが上がるメンバーに囲まれて、鴨原は胃が痛くなった。佐竹はニコニコとこちらを見つめてくる。もしかしてわざと夏目先輩の視線に気付かないフリをしているのか、と感じて、鴨原は更に彼を尊敬するのだった。

「しょーがねえな…。これ以上、人に言うなよ。特に女、メンドクせえ事になるからな。分かったか？」

「ハイイ」

「はい」

二人が部室から出て行った後、鴨原はふと気になって夏目に尋ねた。

「そっいえば、夏目先輩って桜野先輩と同じですね」

「あ？」

静けさが耳についた。先ほどの賑やかな空気と一変して、少

し物悲しくなる。

「だって、新聞部部長で、生徒会長で。今更ですけど、二人とも何となく似てるなって……。あ、タイプは全く違いますけど」

「余計だろ」

いつものように素っ気ない返事。だがそこから怒りは感じられない。

「ス、スイマセン……。でも、もしかして先輩も、桜野先輩に憧れてたりするんですか？だから部活も、生徒会も同じで……。とか」
言った瞬間、鴨原は後悔した。何だか浅い事を聞いてしまったようで、怒られそうな気がしたからだ。けれど夏目は、怒鳴る事もせず、かと言って馬鹿にするのでもなく、鴨原を強い視線で睨み返した。

「俺は先輩になんて、憧れてねえよ。アイツと一緒にするな」

アイツ、というのが本田のことなのか桜野のことなのか、鴨原には分からなかった。それきりその話を続けることはできず、気まずさを埋めるようにポツキーを手にとって口に運ぶ。

夕日が空間を照らして、お互いの顔を光で埋めた。

夏目は黙ったままだった。

7・桜野先輩

よく晴れた日だった。

ゴールデンウィーク初日ということもあり、街は人込みで賑わっている。中心地に位置するこの高校の周りにも、渋滞した車が列を作って抜け道を探していた。

「はあ、せっかくの休みだっていうのに、なんか疲れそうですね…」
三階の部室の窓からその光景を眺めつつ、鴨原はそう呟いた。途端に遠くから、パパーッと車のクラクションが聞こえてくる。

「そうだね。お休みなのに学校に来てる僕たちの方が、よっぽど楽しんでるよ」

隣にやって来た佐竹がチラリと窓の外に視線を移した。

「先輩たち、まだかな？」

「一応二時の予定だけど…。もう少ししたら来るんじゃない？」

時計は丁度二時を示しているが、ゆっくりとその差を広げていく。部室内では部員の二人と、佐竹・本田がすっかり集まって新聞部卒業生たちを待っているところだった。

「俺はいつでも大丈夫だよ。どう、みんな？」

手鏡でササッと一つに結んだ髪を確認し、本田は腰に手をあてて、右足を少し前に出しながらポーズを取った。学ランを第二ボタンまで開け、そこからピンクのＴシャツと銀のネックレスが覗いている。ズボンについた綺麗な折り目は足の長さを強調させ、足元は新品の上履きが白さを際立たせていた。

「何か違う気もするけど、置いとこう！」

「ウルサイ」

ベシッと本田が佐竹の頭を叩く。

「いたっ」

「い、良いと思うよ！その赤色のヘアゴム、可愛い」

先輩たちが来る前に陰悪なムードになってはいけないと、鴨原は

適当に薔薇のポイントが付いたそれを褒めた。すると本田は嬉しうに後ろを向いて、ポニーテールを揺らす。

「でしょ？いつもは校則に引っ掛かるからこんな色のつけないけど、今日は良いかなって。ね、先輩、可愛いでしょ？」

（なぜそこに話を振る！！）

ギクツとして鴨原が夏目を見ると、彼はいつもの黒革の椅子に座ったまま、こちらを見ずに呟いた。

「校則って案外大事なんだな」

「え？」

部室のドアが二回、叩かれる音がした。ハツとして音の方を向くと、「あー懐かしー」と低い聞き覚えのある声と共に、ガチャツとドアが開いた。

「よっ、元気か！？」

「芝先輩！」

額から流れる真黒な長い髪を首元で一つに結び、男は薄い眉を吊り上げた。耳元で沢山のピアスが輝いている。

誰…、という顔つきの本田と佐竹を置いて、後輩である二人は嬉しそうに彼に近づいた。

「一人ですか？」

「いや、今二人とも来てるけど、俺だけとっと来ちゃった」

「随分思い切りましたね…」

「あ？だろ？ずっとしたかったんだ、ピアス。お前もどうよ？」

耳を引っ張られ、鴨原は思わず体を引っ込めた。

「はは、考えときます…」

すると再び部室の外から話し声が聞こえ、半分だけ開かれていたドアが全開になる。

「芝、勝手に先行くなよなあ」

「そうだよ」

そう言っ姿を現したのは、どこことなく大人びて品の良さを保ちながらも、爽やかな笑顔が親しみを感じさせる男、そして胸元まで

ある緩いウェーブの髪を揺らして、柔らかな空気を纏った女。

「おお、悪い悪い」

芝が二人を見ずに、黒革の椅子に腰かけた。そんな彼に気付きながらも、夏目は何も言わず二人の先輩を見ている。もともとこの椅子は芝が勝手に持ち込んだものなのだ。

「夏目、元気そうだな」

桜野透哉は、笑いながら夏目の頭を軽く叩いた。サラリと茶色の髪を揺らしながら、部室内をぐるりと見渡す。

「相変わらず汚いな」

「マサ、生徒会長になったんだって？ 凄いじゃない」

その隣で、川原綾乃がそう夏目に声をかけた。

「別に、凄くは無いですよ。俺がなって当然ですから」

そう言う二人はアハハッ、と同時に笑って、鴨原に問いかけた。

「大変だろ、コイツと一緒にだと」

「実は心配してたんだよねえ、鴨原くん部活辞めてないかなって」

「うっ…、桜野先輩、川原先輩…！」

鴨原が二人の先輩に抱きつくのを、夏目はケツといった感じで眺める。

「鴨原、覚えとけよ」

「うわーん」

「あの…？」

スツカリ忘れ去られていた本田と佐竹が、おずおずと言葉を発した。

「ああ、そうだ。さっきから気になってたんだけど、コイツら新しい部員？ 良かったじゃん」

ジロジロ見ながら芝が二人を指差す。本田は偶然にも彼と髪型がカブってしまっていることに気落ちしていたが、気合を入れて腹に力を入れた。

「いえ！ 違…」

「ああ、違っんです。僕は去年生徒会の一員だったので、久しぶり

に桜野先輩に会いたいなと思つて、夏目さんから許可を貰つて来させてもらったんです」

本田より先に、佐竹が落ち着いた態度で丁寧に答える。

「ああ、佐竹くん、だよな？俺覚えてるよ、夏目に結構懐いてたもんね。せつかくの休みなのにこうして来てくれるなんて嬉しいよ。ありがとう」

「えっ、覚えていてくれたんですか！？僕も嬉しいです！」

目の前で桜野と佐竹が楽しげに話し出すのを、本田はフルフルと体を震わせて眺めていた。密かに佐竹は自分に恨みがあるんじゃないだろうか。そんなことを思いながらも、挫けそうになる気持ちを抑えて今度こそ、と声を張り上げる。

「先輩！俺、今年生徒会（副）会長に選ばれた、本田和樹って言います！あの、俺……ずっと桜野先輩に憧れていたの、いつかこうしてお話したいなつて思つてたんです！」

「カズ、そんな分かりやすく肩書き偽っちゃダメだよ」

「偽つてないよ！ちゃんと云つたよ、（副）会長つて」

「すんごい小さい声だけだね」

隣から聞こえる突つ込みに怒鳴りそうになりながら、本田は深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。スー、ハー。

「本田くん？聞いたことあるよ、去年の一年生の有名人でしょ。でも、俺なんかには憧れたつて何も良いこと無いよ。まあ俺は嬉しいけどさ。てゆうか、さっきからこんなに褒められてはっかだと……、なんかのドツキリ、夏目？」

桜野が照れながらそう言つと、夏目は「さあ」と肩をすくめた。

後ろでは本田が今にも飛びかかりそうな勢いで桜野を見つめている。「相変わらずだな、お前は」

「先輩も」

そうして新旧新聞部の五人＋おまけの二人は、狭い机を囲んで久しぶりの再会に昔を思い出すのだった。

8・綾乃さん

「プハー、こういうトコで飲む酒って最高だな」

芝が缶ビールから口を離して、空になったソレを机に並べる。

「ちょっと、先輩！ちゃんと持って帰ってくださいよぉ」

そう言いながらも、鴨原は空き缶をビニール袋に詰めて新たなビールを準備した。

「はいはい、分かってるって。でも一度ぐらい、学校でこういう事してみたいだろ？今日はうるせー奴らもいねえんだからさあ。な、透哉もそう思うだろ？」

「俺は昼から飲むほど落ちぶれてない」

「ひでえなー」

それでもプルタブが引かれて、プシュツと炭酸が弾ける。

「鴨原、もうコイツに酒やらなくていいから。袋に入ってるの、俺に渡して」

「あ、ハイ…」

桜野が受け取ったビニール袋の中を覗いて、何本飲む気だよ…、と呟いた。

「つまんねー奴」

「あ、そうだ。先輩たち、大学はどうですか？俺も二年だし、そろそろ受験とか考えないとなって思っているんですけど」

真面目ぶって本田が尋ねた。三人に聞いてはいるが、本田の視線は相変わらず桜野に集中している。

「受験とか、早いだろあ、まだ。俺なんて、三年の夏休み明けに勉強始めたぞ」。ま、短大だけど、大学の名前とか、別に興味ねえしなあ」

芝がゴクゴクとビールを飲みながらそう答える。

「芝ちゃんらしいね。私は、三年生になる前ぐらいからかなあ。進路ごとに、クラスも別れだすじゃない？結局志望校じゃない大学に

なっちゃったけど、今は納得してる。良い友達も、沢山出来たしね。
…ああ、でもやっぱり、勉強についてなら透哉に聞くのが一番かもね、透哉？」

ふんわりと笑って、綾乃が隣の彼に笑顔に向けた。

「俺？そんなに参考になるようなこと、何もないけどな。俺だって本気で受験勉強ってヤツをしたらのは三年からだし。…でも、それまでは定期試験とか実力試験とか、取りあえずそういう学校の試験を真面目にやっていれば、基礎が作られて楽だから大事にしておいた方が良いと思うよ」

丁寧に語られる先輩たちの言葉を、本田だけでなく、鴨原も、佐竹も、みなが真剣に聞いていた。その空気に気付いたのか、桜野が再び元の笑顔に戻って手を振る。

「ああ、そんなに深く聞かなくていいぞ。今日は別に、そんなこと言いに来たんじゃないからな」

ただ、真正面からの無味な視線は誤魔化さずに受け入れた。

「ホラ、夏目みたいにさ。軽〜い感じで、聞いてくれればいいから」

「俺も、参考にさせてもらいますよ」

「はは、そんな目つきじゃなかったけどなあ」

そんなやり取りをニヤニヤしながら芝が眺めていたが、その姿には誰も気づかない。

「そつえば、マサ、今年受験でしょ？大変になるね」

綾乃がそう言うと、「ああ、そうだ」と鴨原たちも頷いた。

「先輩、今年は忙しいって言ってましたもんね」

「ああ…まあな。でも何とかなるだろー。だって俺、学校の勉強もちゃ〜んとしてるし、予備校にも通ってるしな」

そう言っただけで夏目は目の前の桜野をニッコリと見返した。

「何ソレ、相変わらずその自信はどっから来るのよ、マサ？本当、変わらないんだから…」

クスクスと綾乃が笑うと、夏目も顔を和らげて彼女の方を向いた。
「どこからでしょうね？俺にも、分かんねえかも」

「そりやどうしようもないね」

綾乃だけがニコニコと笑っていて、不思議な空間だった。鴨原は少しだけ、去年までのこの部の雰囲気を感じ出して懐かしくなった。「そう、そういえばねえ、せっかくだからみんなにお土産買って来ようと思つて、ありきたりなんだけどコレ、八つ橋。美味しいから食べて」

そう言つて、綾乃が紙袋から二つ、綺麗に包装された箱を取り出して机に並べる。

「わあ、俺八つ橋大好きです！お土産で貰った時しか食べれないんだよね」

「僕は初めてだなあ。名前は聞いたことあるけど、どんな物なんだろう…」

本田が嬉しそうに、その横で佐竹も興味津々に開けられていく箱を眺めている。

「川原先輩つて、京都でしたっけ」

「そうなの、だから八つ橋。ハイ、普通のアンコと、白アンコと、抹茶！お勧めは抹茶です」

いつの間にか、皆で八つ橋の試食会となっていた。立食パーティーのようにそれぞれが立ち上がり、ウロウロしながら会話をする。

「おお、こういう食感なのか…。モチモチして美味し」

「でしょ？本田くんもどうぞ」

「綾乃さん、ありがとうございます。あの、メアド教えて貰えますか…？」

「デメエ何言つてんだ」

本田がそう言った瞬間、ゴンツと後ろから夏目が彼の肩を殴った。「せ、先輩、グーで…。冗談に決まってるじゃないですか…」

「お前は信用ならねえ」

それを見て綾乃がケラケラと笑う。

「面白いね、二人、いいコンビじゃない？」

「先輩…、勘弁してください」

二人が同時にそんな事を言ったので、再び綾乃がアハハツと笑いだした。

「やっぱり良いじゃない」

「…白アンうまい」

話を逸らして、夏目は口をモグモグ動かすことに集中した。定番の黒アンと、珍しさから抹茶はほとんど数を減らしているのに、なぜか白アンだけは他の二つより取り残されている。

「ああ、良かった。マサ、メールで白アンが良いって言ったじゃない。だから気に入ると思ったんだあ」

その言葉に反応して、芝が煙草（もう誰も突っ込まない…）を吸いながら二人を見た。

「何、お前ら、メールとかしてんの？」

「え、そんな、いつもってわけじゃないよ？丁度みんなが集まるって聞いたから、マサに好み聞いたの」

「へえ？それなら俺にも聞いてよ」

「ええ？透哉には前にあげたでしょ。今日は後輩たちがメインなんだから、透哉には聞かなくていいのっ」

「綾乃、そんなにムキにならなくていいじゃん」

笑いながら、芝は煙草の煙をフウツと宙に吐き出した。桜野も口元に笑みを浮かべながら、コップに入った緑茶に口付ける。

「もう…、二人とも意地悪なんだから…」

「ねえ？」と綾乃は夏目に目で同意を求めた。夏目も同じように、そうですね、と目で合図する。

「あの、夏目先輩と綾乃さんって、もしかして…、もしかして関係なんですか？」

静かになった空間に、小声で割り込みながら本田が回りくどい言い方をした。え？という顔をした綾乃の代わりに、夏目が小さく笑って、違えよ、と答える。

「それは、綾乃さんと桜野先輩。さっきのは単に、嫉妬してただけ…ですよね、先輩？」

薄く笑って夏目が問いかけると、桜野は壁にもたれて呆れた顔をした。

「お前はいつつも単純だな。俺は、綾乃をからかうのが面白いだけだよ」

「それもどうかと思うんですけど」

睨み返した綾乃の視線を無視して、桜野は夏目をニツコリと見つめた。

「夏目、お前と俺は違っただから。もっと冷静に周りを見られるようにな」

空になったコップがカランと机の上に転がった。

9・佐竹君

窓を開け放つと、涼しい風が吹き込んで来て教室内を気持ちの良い空気で満たした。感覚が慣れてくると、外部から流入してくる音と混ざり合つて密室独特の窮屈な空気を消し去ってくれる。

五月の中旬。

佐竹はぼんやりと誰も居ない生徒会室に入り込んで、窓際の机に座った。何をするでも無い。ただ静かで、一人になれる場所を探してみたらここだった。今日は生徒会の集会は無いし、放課後誰かが来る気配も無い。

「はーっ、涼しいねえ」

思わず独り言を言ってしまう。彼は独り言が多い。思ったことを素直に口に出してしまうのだ。そして勿論悪気もない。ただ本心を言っているだけなので、それが何か他人に迷惑をかけているのだろうか？と疑問を持つぐらいである。

つまりタチの悪い人間。

佐竹は晴れ渡った空を眺めた。雲一つ無く、青空が広がっている。（そういえば、あの日もこんなに晴れた日だった）

ゴールデンウィークの一日目。新聞部の先輩たちと集まって、部室でダラダラと話をしたただけの日だったが、それでも佐竹にとって新鮮だった。

（あんなに何人かで笑いあったの、久しぶりだったな。また、ああいうことしたいなあ…）

思い出して、つい顔がニヤけてしまった。桜野先輩は相変わらず爽やかでシッカリしていて、優しい綾乃さんとはお似合いのカップル。自由に振る舞っていた芝先輩も、傍目には目茶苦茶な人に見えるけれど、普通に話してみると面白い人だった。

（夏目さんがイジられるレアな姿も見れたしね）

いつも唯我独尊に振る舞っている夏目が、いつもとは少し違って

見えた。偉そうなのは相変わらずだけれど、何だかちょっと子供のような、小生意気な感じ。

「面白かったなあ……」

ウーン、と伸びをして、再び窓の外を眺める。思い切り空気を吸い込んで、伸ばした両手をダランと垂らした。

すると突然カツ、カツ……と教室の外から靴音が聞こえてきた。思わず佐竹は身構える。通り過ぎて欲しい、と心の中で願っていたが、足音は丁度生徒会室の前で止まった。

（誰か来る）

振り向いてジッと入口を見つめていると、ゆっくりとドアが開いて隙間からヒョコンと顔が覗いた。

「ハッ」

やって来たのは本田だった。一瞬ビクツとした顔をしたが、本田は相手が佐竹だと気づくと、ハアッと大きく溜息をついて教室に入ってくる。

「あれ、カズ、どうしたの？」

「あ……誰かと思った……。驚かさないでよ。俺はちょっと、忘れ物捜し。朝ココに寄ったからもしかしてっと思ってさあ……、ウーン」
そう言っただけでいる机の足元を見て回りながら、アッ、と声をあげる。

「あゝ、ヤッパリね。置きっぱなしだと思ったんだあ。英語の辞書！今日の授業で困ったよ」

可愛らしい手提げに入ったソレを持ちあげて、本田は確認するように辞書を取り出して中身をチェックした。

「プッ」

「佐竹くん……、何笑ってんの」

途端にギロリッと睨まれたが、それでも佐竹の笑いは止まらなかった。

「いや……、なんか、可愛いね。女の子みたい」

真っ白なファー生地の手提げを指差して、ニヤニヤと告げる。本

田は、分かってないなア、と呆れたような表情でその入れ物を手に掲げた。

「コレ、今すぐく人気なんだよ、知らないの？持ってたら女の子たちが直ぐ寄ってきて、結構話題になった。佐竹クンもこれぐらいチエックしときなよ」

真剣に怒るその表情に、そういう所が女の子みたいって言ってるんだけどなあ、と佐竹は頭の中で突っ込んだが、笑いが堪え切れそうにないので言わないでおいた。彼にしては立派だろう。

「ああ、でも、辞書持ち歩くの、大変じゃない？僕電子辞書使ってるよ、超便利」

「フン、そりゃ便利だろうけどさ。やっぱり自分の手でページをめくって、線を引いた方が覚えるよ。後で見ても、コレ調べたなあって思いだせるし。佐竹クン、英語得意？」

「うーん、得意ってわけじゃないけど。まあまあかな？平均ぐらい」
「だろうね。いい？本当に得意になりたければ、きちんと努力しないと無理だよ。苦労もせずに上手くやっていこうなんて、甘いとか言いようがない。つまり電子辞書は俺にとって苦労も何も無い、不要な物でしかないんだ」

一気に言いきって、本田はウン、と自分で納得する。考え方はかなり極端だが、この人はやっぱりウチの学年トップなんだなあ、と佐竹は改めて実感した。努力をしている。それは決して生半可なものではなくて、自分で自信を持って言いきれくらい、行動が伴っているのだろう。

「なるほどね、ありがとう」

「ウム。ていうか佐竹クン、何でこんなトコに一人でいんの？怖いよ？」

辞書を手提げバッグに戻しながら、本田は不思議そうに佐竹を見た。

「ああ、静かに勉強出来る場所があればなあって、探してたんだ。それでココに」

「へえ、ここなら良いかもね。誰も来ないし、周りも静かだし」

教室を出て行こうとした本田だが、ふと一つ離れて置かれている生徒会長の机に近づく。

「ラブレターだね」

ニヤリと笑って、本田は机の上に置かれていたピンクの封筒を手にとった。

「今時、古典だね。僕もさっきから、何かあるなあって思ってたんだ」

「名前は、んー、書いてない…、中かな？…ねえ、佐竹クン、見ちゃう？」

「趣味悪いなあ。…でも、面白そうだね。カズ、開けてよ」

「だよねえ！じゃ、開けまーす」

封に貼られた小さなシールをピリツと開けると、中から一枚の紙が出て来た。開くと三、四行の短い文章で、右下にちょこんと名前が書いてある。

「…、知らないな。生徒会の人じゃないね」

「普通の生徒は、鍵貰わないと入れないハズだけだな…。誰かに頼んだのかもしれない」

二人は生徒会長の机の前に立って、そのラブレターを覗き見た。

『夏目先輩、一年前からずっと好きでした。少しでも気になってくれたら、このアドレスにメールください…、待ってます』

「ふーん、随分控えめだね。可愛らしいけど」

「そうだね。でも俺なら取りあえずメールぐらい送っちゃうな、タダだし。夏目先輩は…、どうだろうね？」

「送らないでしょ、あの人は」
「だね」

二人で軽く笑って、そのラブレターは元の通り綺麗に直して机に置いた。これで異常ナシ。

「でも、告白とか良くできるよね。俺には出来ないよ、振られたら怖いし」

本田がラブレターを見つめながら、そう呟いた。彼は告白など今まで一度もした事が無い。する必要が無いからだ。

「羨ましい限りだね」

「まあねえ、告白しなくても、してくれるんだからね。そのためには自分を磨く努力も怠らないよ」

「はは、ああ、そこに辿りつくわけね」

「そう」

フン、と笑って本田が踏ん返り返る。佐竹としては、こんな変な人間になぜ女の子たちが群がるのか、顔さえよければそれでいいのか？と思ったりもしていたのだが、本田という人はそれなりに魅力的な部分を内面にも持っているのかもしれない。そこに女は惹かれるのか？

「佐竹くんは、そういうのなの？」

「…僕？一回だけ、告白されたことあるなあ。小学生のころ」

「それって告白なの？」

「ウツ…、まあ、カウントさせてよ。ああそれで、告白も一回、したことがあるよ」

途端に本田がエツ！と叫び、興味津々になって佐竹に近寄って来た。

「佐竹くん、言っちゃうタイプなんだ？意外だね、それでそれ？」

「それでって…、まあ、結局ダメだったんだけどね。でもまあ、冗談でしょって笑われたよ。だけど僕は本気だったから、その空気には流されなかった。自分の気持ちに嘘は無いから…、自分からは決して、冗談だって笑い話にはしなかったよ」

「へえ…、佐竹くんってなかなか根性あるんだね。でも、その後とか…、気まずくない？」

「向こうは冗談だと思ってるよ。それでも、まあいいと思ってる。多分まだ、僕は好きでいたいんだよね。望みが無いって分かっているのに、近くにいたくて、変な奴って思われても良いからさ…一緒

にいてくれるなら、それでいいかなって」

佐竹の真剣な表情に、本田は言葉が出て来なかった。彼から目を逸らそうと思っても、何故かそうできない。佐竹の横顔は机の上のラブレターを見つめたまま、動かなかった。

「本当に、好き、なんだね…」

ポツリと本田が呟いた言葉。佐竹はしばらく生徒会長の机を眺めた後、

「僕に好きな人なんて、いないけどね」と軽く笑った。

「はあ？なんだよソレっ」

真面目になって損した、と本田が声を荒げる。再び佐竹がアハハと笑い声をあげた。本田はどうやら気付かなかったようだ、彼の照れ隠しに。

佐竹の安心した気持ちに反して、だんだんと冷たくなる風が二人を包んだ。髪が乱れる…、机の上のラブレターが少しだけ、動いた。

机の上のラブレターを見て、夏目はぐるりと生徒会室を見回した。みんながソワソワしている。それはそうだろう、見てくれと言わんばかりにそこに飾られているのだから。

「……」

夏目は黙ってカバンの中にラブレターを滑り込ませた。その仕草にガツツリと視線を感じながらも、あえて気付かない振りをする。

いつもと変わらずに朝の生徒会の集会を済ませて解散すると、直ぐに本田が近寄って来た。

「先輩、どうするんですかあ？」

「何が」

いやらしく笑いながら、本田が小さな声で囁く。

「ラブレター！返事、するんですか？せっかくだから、メールだけでも……」

「何でお前が手紙の内容知ってる？」

鋭い目で睨まれて、本田はハツと口を塞いだ。

「い、いや、定番じゃないですか、そーいうの……」

「最低だな。っーかコレ書いたの、テメエじゃねえよな？」

静かに自分のカバンを指差す。

「ち、違いますよ！そんなことして俺に何の得がっ」

「そうだよな。加えてこんなの見ても何の得にもならねえよ。カズ、テメエは俺の言う事だけ聞いてりゃいいの。余計なことは、考えなくたっていいから、な？」

いつも以上にダークな夏目に、本田は「ハイ……」と返事をするしかなかった。

「じゃあ、今日の放課後の校則確認、俺の変わりにお前やれよ」

校則確認とは、帰り際校門の前に立って生徒たちの服装をチェックするという生徒会の仕事だ。服装の乱れは心の乱れということだ。

定期的に行われているのだが、服装なんかは一時的にどうしても直せしてしまうし、何となくだらない習慣である。けれど仕方がない、それが彼らの仕事なのだから。

「ええっ、先輩、そんなのズルイですよ。ラブレター勝手に見ちゃったのは謝りますから……」

「いや、そんな事どーでもいいんだけど。俺今日用事あるんだよ。だからんなことしてる暇ねえの」

「はあ！？まさかデートですか！その子呼び出してチョメチョメ……」

本田が声を荒げたので、夏目は焦って彼の口を塞いだ。

「フガッ」

「声がでけえ。そんなわけねーだろ、こんなもんすぐ捨てるよ。芝先輩に呼ばれてんだよ」

「芝先輩……？ますます怪しいですね、何する気ですか」

「だからいちいち介入すんなよ、テメエは俺の彼女か？黙って言う事聞いとけ」

言うだけ言っで、夏目はスタスタと生徒会室から出て行ってしまった。すぐさま佐竹が本田の傍に近寄って、どうだった？と尋ねる。「あーム力つく。まあラブレターに興味は無さそうだけださあ。何あの態度？俺のプライベートは無視かつ……、って佐竹クン聞いてよ」佐竹は前半部分だけ聞くと、笑顔で「放課後頑張っでね」と笑って出て行った。一人ポツンと取り残された本田は、愚痴を言う相手もおらず怒りを脳内で発散させる。

『夏目、今度、二人で話そうぜ。また、連絡する』

二週間ほど前、新聞部卒業生たちと部室で集まった帰りに、最後に教室を出た芝は夏目にコッソリそう告げた。それから少しすると本当に彼から電話が来て、会う約束を取り付けられた。

それが今日。

「夏目！こつち」

言われた通りのカフェに足を運ぶと、奥の席で、手を上げた芝と化粧の濃い女が二人で座っていた。

「…先輩、二人だけじゃなかったんですか？」

「まあ、いいじゃん？コイツが暇だって言うからさあ、連れて来た。邪魔はさせねえ」

「わゝ、可愛いね、この子。っていうか、キレイ？なんだろ、不思議な顔…」

ストレートの明るい茶髪に、胸元の空いた服。女は興味津々で夏目をジロジロと見つめてきた。見下ろすと鎖骨が綺麗に浮いて見える。

「既に、気が散るんですけど」

「アハハ、大人しそうな顔して言うねえ、アンタ」

女はケラケラと笑っていた。芝がハイ、と煙草を手渡す。

「黙っててね」

「ハイハイ」

そうして女が煙草を吸いだすと、芝はガブリとコーヒーを口に含んだ。

「で、俺に何か用ですか？」

「冷てえなあ。別に大した用事なんてねえよ。ただお前は俺に対しても、バカにしねーで対等に話してくれるじゃん？だからさ」

「それで、突然？」

「…ちよつと無理あるか」

笑いながら、彼は隣の女と同じように煙草を一本啜える。

「まあ本当のことなんだけどな。だから俺はお前が結構好きなんだ。透哉よりもな」

「桜野、先輩」

意味もなく名前を呟いた。

「そう。あいつ真面目だから、俺みたいなのに説教してくる。良か

れと思つてやつてるんだろうけどさあ、疲れるんだよ。一方お前は同じようにイイコちゃんなのに、俺に何も言わねえだろ？先輩だからって物怖じするヤツじゃねえし、こんな女連れてきても、別れるなんて言わねえしな？」

「桜野先輩、そんなこと言いますか？」

「言うよ。コイツとキヤバクラで知り合つたつて言つたら、あからさまに態度変えやがった。本人の前で、直接だぜ。ちょっと引いたな。」

夏目には想像出来なかった。あの人はそんな小さな事で差別するような人間ではないと思つていたからだ。

「でもあの人、かなり良い人だよ。あの後アタシにちゃんと謝つたもん。スミマセンでしたつて。普通、自分の気に入らない相手にそんな事出来ないよ。」

隣の女が煙草を持った手を振りながら、話に入つて来た。

「何だよ、俺聞いてねー」

「だってあの人と別れてから、アンタすつごく怒つてくれたから、ちょっと嬉しくて。でもアタシはあの人のこと嫌いじゃない。あの人の人にとっては、アタシみたいなのが生理的に嫌いなんだつて。芝は大事な友達だからそんな相手と付き合つて欲しくないつて。それでもきちんと謝つて、もし付き合いたいならその仕事辞めてもつと自分を大事にしるとか何とか。アタシとしては放つとけつて感じだけどさ。ちょっとは、嬉しかったよ。だから良い人だと思う。」

女は思い出したようにフツツと笑つた。二本目の煙草に手を伸ばす。

「あー、何でそんな事言う？俺悪者みたいじゃん。せつかくコイツに良い事教えてやろうと思つたのにさあ。」

芝はジトーツ、と隣の女を睨んだ。

「教えたい事つて、なんですか？」

すかさず夏目はそこに食いつく。彼はウーンと考えるようにコーヒーを飲んだ後、まあいっつか、と呟いた。

「ホント大したことないんだけどさ…」

「何ですか、勿体ぶらないで教えてください」

「分かったって。…透哉と、綾乃のことなんだけどさあ。アイツら、別れてるよ。もう、三か月ぐらい前に」

「え？」

予想していなかったことで、夏目はポカンと芝の顔を見た。

「それって…、卒業して直ぐぐらいですか？」

「ん、あー、そうだな。そんぐらい」

考えるように宙を見ながら、芝が答える。

「えっと。何で、それを俺に」

夏目がそう言つと、彼はニヤニヤと笑いながら

「何でだろうなあ…？」

と答えた。

「でも、お前知らないみたいだったじゃん？この前の感じからすると。だから一応言つておこうかなーって」

「でも、あの時先輩たち、何も言わなかった」

「そう、透哉も、綾乃も、何も言わなかった。だから隠したいのかと思つたけど、正直良く分かんねー。まだ、二人とも好きなのかもしれないねえな」

少し、お互い沈黙になつて、二人の間では煙草の煙だけがモクモクと立ち込めていた。芝のコーヒーは空になつて、夏目の水が入つたグラスも氷が溶けて生温くなっている。

「お前の好きにしろよ」

芝が煙草を灰皿に押し潰した。

「俺はお前のこと気に入ってるからさあ…。まあ、透哉も良い奴といえは良い奴だけど。…俺は、お前を応援するよ。何かあったら、俺に言えよな」

ドンツと胸を叩いて芝は笑った。

「…頼りになるか、分かりませんが。好意は有り難く受け取つてきます、センパイ」

時計が五時を知らせる鐘を鳴らしている。

「おう、わざわざ呼び出して悪かったな。また」

「マタね」

二人の声を後ろ背に聞きながら、夏目はカフェを後にした。煙草の煙が制服から匂ってくる。

（これじゃ俺が疑われそうだな…）

匂いを消すためにしばらく街を歩いて帰ろうと、夏目は帰り道とは反対方向へ足を向けた。

11・望月君

白い制服がヒラヒラと校内を舞っている。

六月になり、夏の匂いへと空気が変わろうとしていた。涼しい風が徐々に温くなって、肌に触れた心地良さを失わせている。

「最近は何も暇ですね」

鴨原は机に肘をついて、外を眺めながら呟いた。新聞部は週二回と部活動の日を決めてあるのだが、今の時期はコレと言って特にする事は無かった。月に一度出す新聞も今月は既に出してしまったし、こうして集まる必要も無いのだが惰性でつい部室に足を運んでしまふ。

「ま、いつもだけだな」

椅子に片足を立てて参考書を読みながら、夏目が答えた。彼は今年受験生なので、最近は部活でもこうして本を読んでいることが多い。…というか、彼はいつも自由な事しかしていない。

「結局、部員増えませんでしたねえ…。ウーン、どうしてだろう…」

夏目先輩が部長なんだから、絶対に増えていいハズなのに…」

鴨原は不思議そうに首を捻った。

「俺には興味あっても、新聞なんかには興味ねえんだよ」

「先輩…、よくそんな事を！新聞っていうのはですねっ、大勢の人に色んな出来事とか自分の思ってる事とかそーいうことを一気に伝えられる絶好の媒体なのですよっ！！先輩はその新聞の素晴らしさを知ってるからこそ新聞部に入ったんでしょっ！？」

熱弁を振るう鴨原を冷たくチラリと見て、夏目は直ぐに参考書へと視線を落とす。

「あ？俺は誘われたからココに入っただけ」

「え？…桜野先輩に、ですか？」

「違う。…綾乃さん」

また「え？」という顔をした鴨原が鬱陶しくなり、夏目は参考書

へ意識を集中した。ペラペラとページをめくる音が室内に響く。

「そう、なんですか……」

質問をする隙を与えないように、夏目は思いっきり「話しかけるなオーラ」を背中から発していた。それに気付きながらも、鴨原は頭の中で色々なことを考えてしまう。

（夏目先輩って、そんなに前から川原先輩と知り合いだったのかな……？）

すると突然、部室のドアが強めにドンドンツ、と叩かれた。夏目が顔を上げて、鴨原の顔を見る。

「誰だ？」

「うーん、ここに来る人なんてそうそういないし、きっとまた本田君か佐竹君じゃないですか？最近は来てませんけど……」

二人で顔を見合わせていると、再びドアがノックされる。

「は、はい」

鴨原が出て行こうと席を立ちあがった時、痺れを切らしたようにドアが開いた。

ガチャツ。

「……」

そこに現れたのは、ギョロリとした目が特徴的な男だった。前髪が真ん中で分けられていて、広い額が綺麗に覗いている。纏まった髪から見える両耳には二つずつ丸いピアスが開けられていて、それは彼の下唇にも同じように飾られていた。

その彼はスタスタと部室に入ってきて、自分を見つめている二人の部員とパツチリ目を合わせた。しばらくシーンとした空間が訪れて、勝手に閉まったドアの音だけがやけに大きく響いた。

「え……と、あの、どちらさまで？」

彼の風貌に圧倒されていた鴨原だが、恐る恐る尋ねる。グイッとこちらを向いた顔に、鴨原は心の中でヒイツと叫び声を上げた。

（怖いようっ）

「俺に、言ってるの、アンタ？」

「そ、そうですね…」

見開かれた瞳がニヤニヤと笑いだした。鴨原は内心ビクビクで、男の後ろに座っている夏目に視線で合図する。

（夏目先輩、助けて！）

「じゃー自己紹介。俺、望月蓮。みんなはノゾムって呼ぶよ、ノゾムでもレンでもどっちでも好きな方で呼んで。…んでさ、ここって、新聞部であってよね？」

望月はジッと鴨原から視線を逸らさずに聞いた。なんで僕にばかり…、と頭の中で愚痴りながらも、鴨原は頷く。

「そ、そうですね。ええと、新聞部に何か用、ですか？」

「用つつか、何つかさあ。君、下級生でしょ？先輩の顔も、知らないの？」

「え？」

鴨原が不思議そうな顔を見ると、望月は後ろを向いて、今度は夏目の姿を上から下までジッと眺めた。

「アンタ、部長でしょ、夏目くん」

「そうですね」

夏目は怯むこともなく、ただ正面からその視線を受け止めている。そんな堂々とした夏目の態度に、鴨原は心の中で密かに安堵した。

（夏目先輩がいてくれて良かった…）

「やっぱりね。有名人だもん。ねえ部長、アンタなら俺の事、分かるよねえ？」

腰を折り曲げて夏目の顔を覗きこむ望月に、彼は一瞬でパツと、いつもの作り上げた笑顔を向けた。

「ああ、知ってるよ、望月君。君、新聞部だったよね？」

「ええっ」

思わず叫んでしまつて、鴨原は自分の口を両手で塞いだ。そのリアクションを見て、望月は嬉しそうに「そう！」と頷く。

「でも、だった、じゃなくて、今も新聞部のつもりだよ、俺は」「いやあ、悪いんだけど、一年間学校にも来てなかったから流石に

退部扱いにさせてもらったよ。入るなら、顧問の先生に再度入部届け出して貰わないと……」

「えーマジで！メンドクサイなあ。まー俺、学校自体久しぶりに来たしさあ。懐かしくなってるよとココ寄っただけだから、そこまでする気にはならねーなあ」

そう言って手近にあった椅子に腰かける。

「学校ってマジつまんないじゃん？だけど出席日数がヤバくてさあ……。あ、ちなみに俺今年ダメだったら二回目の留年になっちゃうのね？そーなったら笑えるじゃん、だからそれは流石に勘弁ッ！て」

望月は一人でヘラヘラ笑っていた。後ろで夏目も穏やかに笑っている……が、それがマックスの愛想笑いだという事は鴨原にも分かった。

「ああ、芝とか元気？俺あいつに誘われて入部したんだけど、どーも馴染めなくてさ」

「芝先輩、元気だよ。先輩たちみんな忙しそうだけど、何とかやってるみたいだし」

「へえ？あいつも大学生だもんなあ……。つーか夏目くん、アンタ何でタメ口きいてんの？」

笑いながら、ギョロツとした目を夏目に向ける。夏目は笑顔のまま、

「だって、同じ三年でしょ？ああ、でも気に入らなかったら直すよ」とニコリ答えた。

「……イヤ、別に良いけど。でも……、なんか夏目くんって、桜野と同じ雰囲気だね……」

望月が顎を上げて、夏目を見下すように眺める。

「桜野先輩？そうかなあ、自分では思わないけど」

「ウン、似てるよ。俺、桜野って大っ嫌いだから良く分かる」

ニコニコしているのに、望月の目は全く笑っていなかった。

（何この修羅場！？）

鴨原は二人の中に入ることもできず、ただ外から眺めることしか

できない。鴨原は望月の事など全く知らなかった。鴨原が入部したのは一年前…、丁度望月が学校に来ていなかった時期なので、知らなくて当然だろう。

「そうなんだ」

「そう。あいつの正義振りがざした態度見てると、ぶん殴りたくなる。でも夏目くんはさあ、似てるけどちょっと、違うね。何ていうか…そーいう雰囲気、上辺だけ？多分、裏があるんだろうね。匂って来る、アンタの臭い部分」

望月は真っ直ぐ夏目の目を見て、そう言い放った。二人の間に見えない熱がバチバチと光を発している。互いに腹の探り合いをしているような、息の詰まる空間。

そんな空気を全く気にも留めないように、夏目が口を開いた。

「望月くん、停学になる前も全然部活来てなかったから、俺どんな人なのかなあって思ってたけど…、桜野先輩の言う通り。優しく、気が利いて、親切で、頭が切れて、人の気持ちを理解出来て、」

「おいおい、それ本気かよ？誰の事言ってる…」

「っていうような人とは程遠い人なんだって！ああ、でも面白い人なんだってというのは、理解した…」

「舐めてんのかコラ」

その瞬間、望月は夏目の前髪を思い切り引っ張り上げるようにして額を驚掴みし、夏目に顔を近づける。それでも夏目はその笑顔を保ったまま、彼を見据えた。

「怒らないでよ。本当の事を言っただけなんだから。また、停学になるよ？」

「夏目くん…、アンタ性格最悪だね」

「望月くんに言われたくないな」

ハアッと溜息をついて、望月は手を離した。そのまま椅子に座りこむ。

「フン、まあいっかあ。面白いモン見つけたしねえ。アンタとも遊べるし、これから学校も頑張ってるって来てみよっかなあ」

ニヤツと笑って、「よろしくね」と鴨原にも笑顔を向けた。

「は、はあ……」

正直ヨロシクしたくはないが、今の望みは彼がひとまずここから立ち去ってくれることだ。鴨原はヒヤヒヤしながら、望月が部室から出て行くのを見送った。

パタン。

「ハーツ、疲れたーっ」

ドアが閉まった途端、鴨原はそう唸って机にへばりつく。妙な緊張感がやっと消えて、いつもの部室の空気がやっと戻ってきた気がした。

「鴨原、てめえは何もしてねえじゃねえかよ」

「ウウツ、すみません……。先輩がいて助かりましたあ！っていうか！またあの人来たらどうするんですか！何か夏目先輩のこと気に入っちゃってるじゃないですか！」

ガバツと起き上って夏目を見ると、彼は再び参考書を手に取ってページをめくっている。

「ああ、かなり面倒だな。どうにか上手く、丸めこまねえとな」

「そ、そういう方法ですか……」

淡々と話す夏目。鴨原は尊敬のような呆れのような、何とも言えない感情で彼を見つめるのだった。

12・雨の日

「バイバーイ」

「じゃあねー」

響き渡る楽しい生徒たちの挨拶。その一方で、低く唸り出した上空からはパラパラと雨粒が落下していた。

「うっわ、最悪」

下駄箱の前で、レナは悪態をついた。今朝チェックした天気予報は、雨が降るなんて一言も言っていなかった。だから彼女は傘なんて邪魔くさいものは持たずに家を出て来たのだ。

「何だよ、嘘つくなよ」

イライラと空を眺める。今日の放課後は部活も生徒会も無い。早く帰って弟のゲームをコツソリ進めてやろうと考えていたのに、このまま行くと予定が狂ってしまいそうだった。

（これなら生徒会の集会あったほうがマシだわぁ。夏目くん見られるし〜）

ぼんやりとそう思う。あの穏やかな笑顔を見ているだけで、彼女の心は癒されるのだ。

「はーあ」

「あれ、堺さん。どうしたの？」
ドキッ！

こ、この声は…と思いながら恐る恐る後ろを振り向くと、そこにはレナが望んでいた通りの人物がこちらを見ていた。

「な、な、夏目くんっ！！」

「さっきからボーツと突っ立って、考え事？」

その透き通る声が、今私の名前を呼んでいた…、「堺さん」って…！！

「…堺さん？」

目の前の顔が不審そうに眉を寄せたので、レナはハッと我に返る。

「あ、あのつ、外！雨、降ってるから…、私、傘持ってなくて、困って…」

まるで外国人がカタコトの日本語を話しているようだな、と彼女は呆れた。

「ああ、雨ね。確かに今日は雨の予報じゃなかったけど、でもコレ夕立みたいだから。ちよつと待ってたら、すぐ止むと思うよ」

「え、夕立？…そういえば、そんなことも言ってたような…」

「でしょ？堺さん、今日何か急ぎの用事でもあるの？」

「う、ううん、何も無いっ。…夏目くんは？」

「俺は五時から予備校。でもあと一時間あるから、それまでに止んでくれればいいかな」

微笑みながら、夏目はそう答えた。

（夏目くんと、こんな風に普通の会話ができるなんて…）

レナはうつとりと空想の世界に入る。

彼女は高校一年の時から夏目のことが好きだった。同じ学年に素敵な人がいると噂が立ち、友達に連れられて何となく夏目を見に行つたのがきっかけだ。つまり、その場で一目惚れ。その後もずっと彼のことを見守り続けていたが、同じクラスになることも、話をする機会も無く三年になってしまった。けれどせめて少しでも近づきたくて、三年で同じ生徒会に入り、名前を覚えてもらう所までこぎつけた。

「今日は一人なの？」

ふいに尋ねられ、レナは意識を現実に戻す。

「えっ」

「ホラ、あと二人…清水さんと東野さん。いつも三人一緒だったから、今日は珍しいなって」

その言葉にレナは感動した。

（夏目くん、私の事、見てくれたんだ…！）

「そ、そうなの！二人とも今日は塾があつて…。私だけ、通ってないから」

「そうだったんだ。じゃあ俺、雨止むまで一緒に待つよ。一人だとつまらないでしょ」

「…ええっ」

レナは我が耳を疑った。

（ウソ？まだ一緒にいられるの？）

「あ、何か用事があるならいいけど」

「ない、ないないっ！私もどうしようかと思ってたの！」

「そっか、良かった。じゃ、空いてる教室でも借りて話でもしてよう」

夏目の言葉一つ一つに、レナの胸はドキドキしっぱなしだ。こんなに接近しちゃっていいのだろうか？でも、でも…、嬉しい。

（ユカ、サチ、ゴメンっ！私抜け駆けしちゃいますっ！）

夏目親衛隊のセンターを務めるレナは、そう心の中で宣言し、先を歩く夏目の後を追った。

「ん、ちょっとはマシになってきた…、かな？」

二人きりの教室で、夏目が窓の外を見ながら呟いた。

「あ、ホントだ」

それでもレナの胸では、お願いだからもうちょっとだけ雨止まないでっ…！と願う自分がいる。

（だって、次にこんな風に二人で話せる時なんて、いつ訪れるか分からないじゃん…）

隣で夏目の横顔を眺めながら、その頬に触れたいと思った。手を伸ばせば届く距離にいるのに、決して触れる事ができない。こんなもどかしさを、レナは初めて知った。

（だっていつもは遠くから眺めるだけだから）

「堺さんは、予備校とか行かないの？」

「え、予備校？行かないよ」

「どうして？ 堺さんって、国立受験組だったよね。学校の授業だけじゃ、結構大変なんじゃない？」

「あゝ、そうなんだけどさ…、ウチ、そんなにお金なくって」

あ、という顔をした夏目の表情に気付き、レナは急に恥ずかしくなった。

（他の人にはビンボー話って笑って話せるのに、夏目くんに言うのは、嫌だな）

「で、でも！ 学校の先生たちも結構協力とかしてくれるんだよつ。

良い参考書とか教えてくれるし…、あと、ユカとサチも…あ、私といつも一緒にいる子たちね、塾で使ってるテキストとか、問題とか、コピーさせてくれて…」

経済的に苦しい事を引け目に感じている素振りを見せないように、一気にまくし立てた。そんなレナの態度に少し押されぎみだった夏目も、直ぐに元の表情に戻す。

「それで、あんなに成績良いの？ 堺さん」

「そんなくて、夏目くんには及ばないよ」

「いや、俺は所詮、与えられた中で出来る事をしているだけだからさ。…そういう努力家なトコは、俺も見習わないとな」

夏目がそんな風に、真剣に反省したような表情をしたので、レナは思わず言ってしまった。

「何言ってるの！ 夏目くんは私よりずっとずっと、ずーっと努力してるじゃん！ 私知ってるよ、一年生の時からテスト期間関係無く図書館で勉強してたの！ 友達も言ってた、超眠くて有名な安田の古典も、何言ってるのか分かんない秀ジイの日本史も、夏目くんだけはいつも真面目に聞いてたんだって…、他にも、私なんかが見てないところで、夏目くんはもつといっぱい努力してると思う！ だから、だから…」

言い始めたは良いものの、文章の収まりがつかなくなってしまった。「だから」を何回も呟いて、途中でハア、と溜息に変える。

「っ、つまり、夏目くんは、私なんかを見習う必要は無い…って、

こと」

その発言を、夏目は最後まできちんと聞き届けた。ウンウンと頷きながら。

「ありがとう。…堺さん、優しいね」

優しいのは夏目くんだよ、と言いたい。その瞳に見つめられているだけで、レナは自分がオカシくなってしまうそうだった。

「でも、堺さんは俺の事、そんなに前から知ってたんだね。びっくりしたよ」

それは…、それは。

喉元まで言葉が出かかっている…この空気がレナをいつもの彼女とは別物にさせていた。今の勢いに乗って、レナは夏目に自分の全てをさらけ出してしまいたくなった。

（だって、今言わなきゃ）

「堺さん？」

「好きです!!」

「…え」

（私は何を言っているんだろう…）

頭の中で呟きながら、もう取り返しのつかない言葉を発してしまったことには気づいていた。

「ずっと…、ずっと前から、好きだったの。知ってたのは、夏目くんのこと見てたから…」

ほんの少し、夏目と二人きりの時間を過ごせたからといって、レナは自分がこんなにも理性が効かなくなるとは思わなかった。けれどももう限界だったのかもしれない、三年間、ただ黙って見ていただけの思いが深く積み過ぎ、もう抑えきれそうになかった。

「堺さん…、ゴメン、俺、まさか堺さんが、そんな風に思ってたなんて知らなくて」

目の前の驚いた瞳を見つめながら、レナは、ああ、今私は振られたんだ、と思った。

「私…、ダメってこと？」

「堺さんがダメってことじゃないよ。だけど、ゴメン。今は、色々忙しいし、そんな余裕無くて」

夏目の困った顔を見たら、これ以上ウダウダ言っても仕方が無いと分かった。それなのに今のレナにも、それを素直に受け止められるだけの余裕は無かった。

「私を、好きになる可能性は無いってこと？ そんなこと、分からないじゃない、だって、だってさ……」

「俺、好きな人がいるんだ」

そんな彼女の目をシツカリ見て、夏目は言い切る。

「好きな、人？ それ、誰？」

「堺さんは、知らないと思うよ」

「……その人には、私じゃ敵わないってこと？」

「……」
ついに返事が返って来なくなつて、二人の間に沈黙が訪れた。窓の外からは少しの光が漏れて、雨が止んだ事を知らせている。

「諦める、から」

最後のプライドを捨て去って、レナは言葉を発した。

「諦めるから……最後にキス、して」

そう言つて、夏目の傍へ顔を近づけた。十秒ほど見つめ合い、ふいに夏目の右手が、レナの頬をそつと捉えた。

そのほんの少しの肌の触れ合いで、レナの頭の先から指先まで、全身の神経がビクリと痺れた。瞳が震える、唇も震える。初めての感覚に、彼女の力は抜けそうだった。

「ゴメン」

突然、夏目が手を離す。

「ど、どうして」

「堺さん、泣きそうだよ」

その瞬間、レナの頬に涙が伝った。我慢していたものが、一気に溢れ出る。

「ふ……う、うっ……」

嗚咽を止められなかった。それでも夏目は、ゴメン、と何度も謝った。

「ゴメン、俺のせいだね、ゴメン……」

（キスされなくて良かった……）

泣きながら、彼女は心の中でそう思った。その時は、今以上に虚しくなるだろう。そしてもっと、夏目のことを忘れられなくなる。

「ごめんね……」

二人でそれだけを言い合った。天気はすっかり晴れて夕日が眩しかったのに、その教室だけは暗くジITTERとしたままだった。

13・コソコソ

「はーっ、プール気持ち良かったあっ」

部活動として定められている水曜日。鴨原の六時間目の授業は水泳だった。まだ水気を含んだ重たい髪を揺らし、部室の中に入る。

机に座って、荷物をドサツと床に投げ落とした。そのまま机につぶして、「あゝ眠たい」と独り言を呟く。机の上は、窓から差し込んだ強い太陽の熱でジンワリと暖かくなっていた。水に触れて冷えた体を温めるように、彼は頬と両手を机にペツタリ貼り付けて、そこから少しでも熱を吸収しようとした。

「ふう〜」

「鴨原くん、それ気持ちいいの？」

「!？」

突然声が聞こえて、鴨原はガバツと跳ね起きた。きよろきよろと周りを見渡すが、誰もいない。

「空耳…？」

再び元の体制に戻ろうとすると、「コツチ〜」と低い声がする。

すると、部室の角とロッカーのほんの小さな隙間からいきつと手が伸びて、ひょこんと顔が覗いた。

「も、望月先輩っ」

「全然気づかないね〜、鴨原くん」

彼はその隅っこに三角座りして縮こまっていた体をスックと立ち上がらせた。制服の黒いズボンに、綿埃がシツカリひっ付いている。当然だ、このろくに掃除もしない部室の、しかもあんな隅に無理やり座っていたのだから。

「な、何してるんですか、そんな所で…。てか何でココにいるんですか！」

「何って〜、お昼寝？俺さっき超〜苦手な英語の授業を頑張って受けようとしたんだけどさあ、先生が何か超〜俺にビビってんの。俺

さあそういう奴苦手なんだよねえ。あからさまに機嫌取ろうとしちゃってさあ…自分から苛めてくれって言ってるのかなあ。で、やっぱり苛めたくなっただけど流石にそれはマズイかなあと思って、そこで我慢するためにサボタージユを思いついたわけ オツケー？」

「は、はあ」

何がオツケーなのかは全く分らないが突っ込んだら負けだ。望月が初めてココに姿を現した日から、彼は本当に時々部室に現れるようになった。今日みたいに勝手に使っている時もあるし、ただ単に挨拶しに来るだけの時も。それでも大分、鴨原たちは望月という人物を相手にすることに慣れていった。夏目も徐々に素で接するようになっているし、彼をココから追い出すのはもう無理だと諦めているのかもしれない。ただ雰囲気は怪しいけれど、特別害を与えてこないだけマシなのだろう。こうして愚痴を聞かされて、ただ絡まれるだけ。

（また一人、変な人が増えたと思えばいいだけなんだっ！）

鴨原はそう考えることにした。その他の変な人とは、本田や佐竹、そして密かに夏目も含む…彼の中では。

「で、夏目くん来ないね」。やっぱ最近忙しいの？」

望月は近くの椅子に背を預け、今にも滑り落ちていきそうなくらい浅く腰かけた。

「ああ、そうですねえ。先週も来てなかったし。受験勉強とかで、そろそろ部活に出てる場合じゃないのかもしれないですね…」

「へーえ。頭いい奴は大変なんだなあ。勉強なんて、そんな余計な事しなきゃならねーんだからさあ」

今度は机の上に両足をドドンツと乗せてそんな事を言う。

「先輩…。机の上に足を乗せるのは」

「鴨原くんは俺に説教しないでね」

「うっ…」

相手がだれであろうと、結局鴨原は弱い立場に立たされるのだった。

（何でこんな厄介な人達ばかりなんだ…）

「じゃあ今日も来ねえかなあ…」

そう望月が言った途端、

「夏目先輩、来週生徒会で行う校外の清掃ボランティアなんですけど…、つて、アレ？」

ドアを開けてやって来た本田が、その場で取っ手を握ったまま固まった。

「あれ、本田くん。夏目先輩に用事？」

「あ、うん…。そう、なんだけど」

そう言いながら、本田の視線は望月に集中している。

「残念だけど、今日はまだ来てないんだ…。もしかしたら来るかもしれないけど、最近先輩も忙しいみたいだし…、つて、本田くん、聞いている？」

「鴨原クン、君、こんな血色の悪い子と友達なの？」

（ヒッ！本田くん、なんて事を！！）

いや、言いたい気持ちは分かる。分かるのだが、それをまさか本人の前で…、しかも先輩に…。

鴨原が恐る恐る望月を見ると、彼は眉間に三重位皺を寄せて、「アン？」とでも言いたげに思いつき本田にガンを飛ばしていた。

「いや、怖いし。そんな顔していると、眉間に皺出来ちゃうよ？」

なんでそんなに冷静なんだ、と突っ込みたくなるぐらい、本田は普通に望月に話しかけていた。かなり図太いのか、鈍いのか…、本田はヤンキーに絡まれても持ち前の不思議キャラで難なく逃げられるかもしれない。

「オイテメエ。初対面のくせによくそんな舐めた口きいてんな？あの世送るぞコラ」

望月が下唇をゆつくりと舐めると、そこにあるピアスがキラリと光った。

「やめてよ」。俺が死んだら女の子たちみんな悲しむよ。そんなことしたら君なんか一生独り身で寂しく老後を…ブフォアッ」

（あーあ）

望月の拳が本田の右頬に直撃して、彼は床に崩れ落ちた。

「大丈夫、本田くん？」

「な、何で俺が殴られなきゃならないんだ……」

そんな本田を見ながら、どつちもどつちだなあ、と鴨原は呆れる。もう彼ら相手にどう振る舞えばいいかなんて答えは見つからない。

「本田くん……この人は先輩だよ。三年生。しかも訳アリで留年してるから二つも年上なんだよ」

「それは余計」

「す、スミマセン……」

「なっ、ちよっ、先輩だったんですかあっ！それはとんだ御無礼を！許してください！」

途端にハハッ、とひれ伏す本田に、いつからそんなに単純になったんだ、と鴨原は思う。

（きつと、夏目先輩のせいだ。あんなオレサマな先輩に出会ったら、もう長いものには巻かれるみたいなノリが出来ちゃうかもしれない……僕も、そうだし）

「……まあ、分かったならいいよ。じゃあ夏目くんもいないし、代わりにアンタが俺の話し相手になりなよ」

「ええ？でも俺、今からちよつと生徒会の仕事……」

「いいからいいから。そんなモノより俺を優先すべきだろ？ハイ座って。ね、三人でワイワイと語り合おうよ！」

そう言って望月は本田の手を引っ張って、無理やり椅子に押し込んだ。ギユウツ。

「は、話っていつても、何話すんですか？」

本田が前髪を綺麗に直しながら尋ねる。

「んっ、そうだね。ああ、夏目くん。夏目くんについて語ろうよ」

「な、夏目先輩？ソレって、悪口になりませんかね？」

鴨原がそう言くと、アハハッと笑って望月がギョロツと彼の方を向いた。

「何、鴨原くん！夏目くんの話題って、そういう事しかないの？」
「い、いやっ、別にそんなことは！」

「いい、いい！アンタも本音出しちゃいなよ。あんたあのブリッ
コちゃんに虐げられてんでしょ？そりゃ悪口しか出て来ないよね」
「そうだよ鴨原くん。正直俺はム力ついてるね。あの、人を人とし
て見ていない態度。何なの？突然態度変わり過ぎでしょ」

本田が迎合してきたので、更に望月は喜んで手を叩いた。

「おっアンタ言うじゃん！そうそう、ああいう完璧ですって面して
る奴も、こうやって悪いとこ指摘してやらねえとな？周りが褒めて
ばっかだから調子に乗るんだ」

「先輩、話が分かりますね。俺も常々そう思ってたんですよ。大体
どうしてあんな裏表激しい奴が、この学校に生徒会長として君臨し
ているのか……。このままじゃいけないと思います！あんな奴より俺
の方が絶対に優れている！」

（それは本田くんも同じでしょ）

鴨原は心の中で突っ込む。夏目もかなりの二重人格者だが、本田
に言われたくはないだろう。

「まーアンタが夏目くんより優れてるかどうかは分かんねえけどさ
あ。アンタなかなか正直だし、俺気に入ったよ。名前は？」

「本田です。本田和樹」

「本田くんね。俺望月蓮。ノゾムでもレンでも好きな方で呼んで。
ここじゃ誰も呼んでくれないけどノゾムをお勧めする」

「ノゾム先輩ですね。よろしくお願いします」

「よろしく」

そうしていつの間にか謎の同盟が組まれていた。二人は固く握手
をしながら、怪しい笑みを口元に浮かべている。

（大丈夫かな、この人たち）

「鴨原くんも正直になりなよ」

「そうだよ。今なら俺らの仲間になれるよ」

「いいえっ、結構ですっっ！」

鴨原は断固拒否した。二人の冷たい視線よりも、彼は夏目の方が遙かに恐ろしかった。

14・夏を控えて

ブーブー。

『マサ、ちゃんと息抜きしてる？受験勉強って大変だけど、たまには遊んでストレス発散させないと、体壊すよ』

『俺は大丈夫ですよ。自分の体ぐらい、自分できちんと管理できますから。それより綾乃さんの方が大変なんじゃないですか？一人暮らし、きちんとできてます？』

ブーブー。

『私は全然大丈夫だよ。ちゃんと自炊もしてます。どーせマサのことだから私一人じゃ何もできないって思ってるんでしょ』

『アレ、違うんですか。てつきり毎日スーパーのお弁当でも食べてるのかと思ってましたけど』

ブーブー。

『何ソレッ！！ね、ちょっと電話していい？』

プルルル…。

プツツ。

「もしもし」

『あ、マサ電話くれたの？ありがと、って、そうじゃなくてっ。

マサ私の事バカにしすぎ！』

電話口で必死になっている綾乃の声に、夏目は自然と口元が緩んだ。

「だって綾乃さん、見た目と違って案外ダメダメじゃないですか。なんか、不器用っていうか」

『そんなことないよお。どこ見て言ってるのよ？』

「初めて会った時も、そうでしたよ。パソコンルームで、どこをどうやったらそうなるのか分かりませんが、パソコンが壊れちゃって、隣に座ってた俺に泣きながら聞いてきて…」

『ああ、それは言わないでっ。ホントに恥ずかしいんだからっ

…。もう、よくそんな昔の事、覚えてるよね」

「アレは忘れられません」

『う…』

自室の机で、数学のテキストとノートを交互に眺めながら、夏目はシャーペンをカチ、カチ、と鳴らした。

『…ねえ、また、みんなで話したいね』

「ああ…、新聞部ですか」

『そう、あと、本田君たちも入れて。みんなで遊びに行こうよ。マサ、一日くらいなら大丈夫？』

「俺は全然構いませんけど…。アイツらは、いらねーなあ…」

『アハハ、そう言わずに！私結構気に入っちゃったな』マサと本田くんのコンビ』

「ホント、勘弁してください」

そう言いながらも、夏目はカバンから手帳を取り出す。

「もうすぐ夏休みだから…。七月末くらいなら、みんな空いてるんじゃないかな？」

『オッケー、じゃあ私は芝ちゃんと透哉の予定聞いてくよ。マサもみんなに言つといて』

「分かりました。一応、聞いときますね」

『絶対だよ！』

新聞部室に集められた三人は、それを聞いて喜んだ。

「本当ですか！是非遊びに行きましょう！」

「俺も賛成だね！また桜野先輩にも会えるし」

「夏目さんの誘いなら僕も喜んで乗りますよ」

「ウワ、超楽しみ」。俺今からワクワクしてきた」

最後の発言者に夏目はキッと睨みを入れる。

「望月くん。君は誘ってないよ」

「え…、俺お呼びでない？何で？」

「当たり前」

「俺も行ってえ！だって俺も新聞部じゃん！芝の友達じゃん！」

そう言つて駄々をこねる望月の肩に手を置いて、本田は夏目に向かつてキリリと告げた。

「夏目先輩！ノゾム先輩がこんなに言つてるんですから、それぐらい聞いてあげたっていいじゃないですか！」

「テメエが俺に指図すんじゃないねー」

一刀両断。ガツクリと本田が肩を落とす。

「ま、夏目くん、アンタの許可を貰わなくても俺はお邪魔するけどね。行き先さえ分かればこっちのもんだよ。俺には本田くんという味方もいるしね」

ニンマリと望月は笑う。

「カズ…、分かつてるよな？」

望月と夏目の強い視線に挟まれて、本田はしまった、という顔をした。一方本田のことなんて興味なさそうに、傍で見ていた佐竹は「僕はどっちでもいいけどねえ」と呟く。

「で、どこ行くとか決まったんですか？」

唯一話を進めようと、鴨原が夏目に尋ねた。

「ハッキリとは決めてねーけど…。でも七月末に、森口で花火大会あるだろ？綾乃さんはそこに行きたいって」

「わ…、いいですね！」

「花火大会…？んなのカップルで行くもんじゃん」

望月が眉を寄せて、話に入つて来た。

「だから君は来なくていいって」

「あ…、ウソウソ！どーせみんな彼女いないんだしさあ…、一緒に楽しもうよ！」

パツと望月が笑つてそう言つた。みんな「……」と少し黙つて悲しい顔をしたが、彼が言つた事が本当なので仕方無い。

「そうですね！夏休み明けると先輩も忙しくなるでしょうし、遊べ

るうちに遊びましょう!」

鴨原は何だかんだ嬉しかった。学校以外で、普段合わない人達と何処かに遊びに行く計画を立てる。それだけで既にワクワクして、その日が待ち遠しかった。

「あ、そういえばノゾム先輩はどうするんですか？」

「何が」

「今年、卒業した後のご予定とか…」

本田が機嫌を窺いながら聞いている。彼を客観的に見ている限りでは、勿論受験勉強なんてやっている風ではないし、そもそもちゃんと卒業できるかすら怪しい。

「まあ、どうにかなるんじゃないかなあ。とりあえず俺は、卒業する事が目標だからさ」

望月は顎に手をついて、ぼんやりそう言った。

「そ、そうなんですか」

「予定が無いなら、僕たちともう一年一緒に勉強しませんか？」

何の悪気も無くニコニコとそう言った佐竹に、思わず全員が吹き出す。

「さ、佐竹くん…」

「アンタ俺の人生を何だと思ってんの」

それで何だか皆、もうどこでもいいや…といった雰囲気になったので、それきりその話は終わってしまった。

そんな賑やかな教室の中まで、太陽は容赦なくジリジリと照りつけている。

季節は夏…もうすぐ、夏休みが訪れようとしていた。

15・花火大会

待ちに待ったその日がやって来た。

午後五時に学校前で待ち合わせをする。卒業生三人がそこに突っ立っていると、後から夏目と鴨原、佐竹がそろそろと校門からやって来た。

「あ、きたきた」

綾乃が手を振る。

「わあ、綾乃さん浴衣だ！」

真っ先に鴨原が笑顔でそう言った。

「そうなの。滅多に着られないじゃない？だからどうしても着たくて！」

本当に嬉しそうに綾乃は笑う。いつも胸元で揺れている彼女の長い髪は、今日はスッキリとピンクの髪飾りで纏められていた。浴衣は白と青が基調の落ち着いた色合いだが、そこにデザインされた蝶の模様は女性らしさを醸し出していた。

「やっぱり女性が一人いると映えますねえ」

右手でメガネをクイツと直しながら、佐竹もしみじみと呟く。

「そうだなあ。流石にこのメンバーで花火とかどうよって感じだったけど。綾乃がいるなら我慢できそうじゃねえ？」

「何様だよお前は」

芝の言葉に桜野が突っ込む。アハハと笑いながら、綾乃は一人後ろで突っ立っていた夏目に向き直り、

「マサは、どう思う？変じゃない？」

と浴衣を見せるように、クルリと一回転した。何故かその場にいた全員が、バツと夏目に視線を集中させる。

「…何だよお前ら」

「いや、別に、何て言うのかなあって」

佐竹がサラリと答える。

「……」

「ああでも、私だけ浴衣って、何か浮いてるイメージ……」

「みんな、お待たせ！」

その場の微妙な空気を完璧に無視して、本田が颯爽と笑顔で現れた。

「ほ、本田くん……」

「いやあ、せつかくのお祭りだって言うからね！今日終業式が終わって即効、家に帰って浴衣のセットしてきたんだ、どう、どう？」

サラリと髪を靡かせてニツコリと笑う彼は、黒のじら模様の浴衣を綺麗に着こなして、カタカタと下駄を鳴らした。

「あつ本田くんも浴衣だ！良かったあ、仲間！」

「綾乃さんとお揃いですね。俺たち似た者同士なのかもしれませんね？」

そう言ってニツコリと王子様スマイルを浮かべる本田。そんな彼を無視して、「そろそろ行く？」とみんなが話し始めた。

「あ、ちよつと待って、まだ……」

そう本田が口を挟んだと同時に。

「見つけた」

校門から満を持して望月がやって来た。

「ゲッ、お前、学校来てたんだ！？」

芝が半笑いで身構える。

「何さ、その態度は？俺だって、新聞部の仲間だもんね。俺だけ除け者なんて、そんな酷い事しないよねえ？」

「ま、俺は別にいいんだけどさ……。ただお前と一緒にいると、ろくなことね……」

「フフ、安心してよ。俺も大人になったんだって。……あ、桜野も、久しぶり」

「よお。ちゃんと真面目になったみたいだな」

桜野は大人の笑顔で対応した。その表情に、途端に望月はハアと眉間に皺を寄せる。

「また説教する気？」

「暇があればな」

「うわーヤダヤダ。やっぱ俺、桜野苦手かも…。って、この、綺麗な女性は、どなた？」

芝に寄りかかりながら、望月はジッと綾乃を上から下までギョロギョロ舐めまわした。その目つきに一步後ずさりながらも、綾乃は笑顔で答える。

「あ、私も、新聞部の卒業生で…」

「へえ、そうだったの！？なーんだこんな可愛い人がいるならちゃんと部活行つてれば良かったなあ。そしたらもしかして、俺アంతとヨロシクできたかもね？」

「行くぞ、綾乃。みんな付いて来いよ」

桜野が綾乃の手を引いて、先頭をさつさと歩きだした。戸惑いながら、綾乃もその後を歩きだす。

「冗談通じねえ奴」

望月はその後ろ姿にベーツ、と思い切り舌を出した。そうして皆がぞろぞろとその後を付いていく中、夏目は望月の横に並んでボソリと呟く。

「オイ、余計な事ばつかり言つなよな」

鋭い視線で睨まれる。

「夏目くん…、怖いな。何怒ってんの」

「大体入部届けもまだ出してないのに、何勝手に部員面…」

「な、夏目！まー心配しなくても、今日はコイツ、俺と一緒に行動させるから！」

芝がパツと、望月の肩を持って会話に入ってきた。

「ハア？なーんで俺がこんなムサイ男と二人で行動を共にしなくちゃならないわけえ？」

「いーから、な？多分向こうには浴衣美女がわんさかいるだろうからさ、久しぶりに良い女ひっかけようぜ？」

「芝先輩…、そんなことしてるんですか」

夏目が呆れた顔でそう言うと、芝はシートと人差し指を口元に当てて、昔だよ、と小声で主張した。

「んー、まあ、たまにはいーかな。しょーがねーなあ」

ポケットに両手をつ込みながら、望月は一応納得したようだ。芝がそーだそーだ、と笑顔で彼の肩を叩く。

「…先輩、ありがとうございます」

「おう、まかせとけ！」

芝がグツと親指を前に突き出した。

川沿いには沢山の出店が並んでいる。焼きそば、フランクフルト、金魚捌い、射的…。どの場所にも人だかりが出来ていて、いつもの静かなこの場所とは比べ物にならない。子供たちが嬉しそうに駆け回る姿が目立ち、あれが食べたい、これがしたい、と笑い合っている。

「アレ、芝先輩は？」

人ごみの中、かき氷を食べながら呟いた佐竹の言葉に、他のメンバーもぐりと周囲を見渡した。

「望月先輩もだよ、あと、本田くんも」

「はぐれちゃったかなあ…」

「大丈夫だろ。子供じゃねーんだから」

夏目がそう言うと、みんな「まあそうだね」とアツサリ頷く。

「夏目、何か食べないのか？お腹減るぞ」

彼自身何も食べていないのに、桜野が夏目を気遣って尋ねる。「そうですね…。俺も何か食べておこうかな」

キョロキョロと辺りを見回すと、少し離れた所にたこ焼き屋が見えた。

「あ、たこ焼き！私も食べたーい。ね、マサ、買いに行こうよ！」
「いいですよ」

「わーい。みんなもいる？」

既にモグモグしていた佐竹と鴨原は「大丈夫です」と答え、桜野だけが「じゃあ俺頼もつかな」と手を上げた。

「了解」。じゃあちよつと待ってて、直ぐ買ってくる。行こう、マサ」

綾乃はそう言つて、夏目の手を引いて人ごみに紛れて行った。その後ろ姿を見ながら、

「なんか二人、良い感じだな」

と鴨原がボンヤリ呟く。途端に目の前の桜野の視線に気がついて、彼はハツと口を塞いだ。未だに鴨原たちは桜野と綾乃が別れた事を知らない。けれど桜野は、そんな言葉を気にする様子も無く静かに微笑んで、「そうだね」と答えた。

「わー、ちよつと待たなきゃね」

たこ焼き屋の前には既に10人程が列を作っていて、二人はその一番後ろにきちんと並んだ。

「熱いなあ」

彼女はそう言つてさり気無く繋いだ手を離した。前髪を直して、パタパタと手で顔を仰ぐ。

「綾乃さん」

「ん？」

「桜野先輩と、何で別れたんですか」

その手が止まった。綾乃はゆっくり腕を下ろして、夏目の顔を見る。

「透哉に、聞いたの？」

「いえ。桜野先輩は何も言つてなかったですよ」

「あーじゃあ芝ちゃんか。まあいつかはバレるんだし言わなきゃっと思ってただけ、なかなか言いづらくてね」

夏目はその笑顔に目を向けないよう、ただ目の前の行列をジッと見つめる。

「喧嘩でもしたんですか」

「喧嘩… かあ。その方が、いいのかも。別に、大した理由があったんじゃないくてね、私がイヤだっただけ。大学生になると、お互い違う土地に離れて、全然知らない友達作って、やっていかなきゃならないじゃない？ そんな状況で、しかも遠距離だなんて…。私、耐えられそうになかったのよ。嫉妬とか、嫌な疑いばかりで、今までずっと透哉に迷惑かけてた…。ただこれ以上、透哉に嫌われたくなかったっていうか…」

ポツリポツリと静かに話しながらも、普通に振る舞おうとしているのが傍目にも伝わった。

「桜野先輩、そんな理由で引き下がる人じゃないと思いますけど」

「うん、そう。優しいから、それでも大丈夫って言ってくれた…。でも、それでも私が一旦別れようって頼んだら、今まで通りでいてくれるなら、別れてもいいって。これまで通り、普通に会って、話をしてくれるならって…。私は分かったって答えたの。それで… 今、こんなんだよ。変でしょ？ 私たち、何も変わって無い」

「…何も変わらないって分かったんなら…、また付き合っても、いいんじゃないですか」

夏目の言葉に、綾乃は少し黙って、クスリと笑った。

「でも私ね、今でも辛いんだよ。芝ちゃんから聞いたけど、やっぱり透哉、大学でもモテるみたいで…、告白とかも、されてるんだって。私、それ聞いただけで嫉妬しちゃうの。こんなだから、付き合ってた時もいっぱい透哉に迷惑かけちゃったし。信用してって、何度も言われたのに、出来なくて…」

ハア、と大きく吐きだされた溜息が、夏目の耳には大きく残った。

「綾乃さん、色んな事考えすぎなんですね」

「…そうだね。こんな余計な事考えなければ、もっとうまく行くはずなのに…」

周囲のざわめきが、二人には遥か遠くに聞こえた。

「ねえマサ、私が変われば、何とかなるのかな」

唐突に、夏目の目を真っ直ぐ見つめて綾乃は尋ねる。

「そんな事も受け止められるようになれば、私たち、まだ大丈夫なのかな？ね……」

「そうですね。きっと、上手くいきますよ。……でも」

「でも？」

「何で、俺に聞くんですか？」

夏目が無表情な瞳で綾乃を見返した。

「そういうこと、俺に聞きますか？」

「マサ……」

「ヘイ、ニーチャン！お待たせ！好きなを選んでくれよ！」

前に並んでいたカップルがいなくなつて、二人の順番が回つてきた。真黒に日焼けしたおじさんがニコニコとたこ焼きを回している。三人分のたこ焼きを買つて、二人は鴨原たちが待っている場所まで急いで戻つた。

「先輩たち、遅かつたですね！」

鴨原が手を上げて、ここだと合図をした。

「ゴメンね、行列出来てて。ね、マサ」

「結構並んでましたね。コレ、先輩のです」

「おお、サンキュ。後で何か奢るよ」

たこ焼きを受け取つて、桜野はニツコリと笑つた。整つた顔立ち。既に暗くなつたこの空間でも、その美しさに気付く事は容易い。

「もうすぐ、花火始まるつて。そろそろどつか座つて待つてようか」

桜野の言葉に、五人は頷いた。人ごみをかき分けて河原を進む彼らの頭上で、ドドンッ、とピンクの光が弾けて、川面に沈んでいった。

16・鴨原君

盛大に打ち上げられ出した花火。その場で人々は立ち止まって、歓声を上げながらその光景を眺めている、そんな中。

「ウーン、トイレどこかなあ、トイレ……」

鴨原はトイレを探して彷徨っていた。元来た道を辿りながら、たしかここら辺に仮設であつたはずだけどな……と歩きまわる。

「あ、あつたー、良かった！」

何とかトイレを見つけると、鴨原は一目散にそこへ駆け寄って用を済ませた。フウツと一息つきながらトイレから出たころには、足取りも軽かった。

「スツキリした」。はやく皆の所に戻ってゆっくり花火でも見ようつと！」

そう呟いて再び引き返そうとした時。

「鴨原くん？」

ふいに声をかけられた。

「あつ、亮ちゃん！」

振り返ると、そこには気の弱そうな、垂れ目の青年がコチラを窺うように立っていた。

「やっぱり、鴨原くんだ！久しぶりだね」

「わあ、ホントに久しぶりだよ！中学卒業以来だったよね」

鴨原は笑顔で彼に近寄った。亮ちゃんと呼ばれたその彼も、嬉しそうに答える。

「そつだよね！良かった……鴨原くん、僕の事覚えてくれたんだ」

「当然だよ！三年間同じクラスだったのなんて、亮ちゃんぐらいだからね！」

久しぶりに再会した二人は、クスクスと笑い合った。亮がふと、笑いを止めて鴨原に尋ねる。

「鴨原くん、友達と？」

「ああ、僕は部活の先輩たちと一緒に来たんだ。亮ちゃんとは？」

「あ、僕は…」

「オーイ、亮！お前そんなところで何やってんだよッ！」

急に後ろから怒鳴り声が聞こえて、その瞬間亮の瞳がビクリと揺れた。鴨原が振り向くまでも無く、背後に人の気配を感じる。

「オイッお前飲み物4人分買って来いって言っただろうが！何サボってんだよ！」

「ご、ごめん」

亮がオドオドと謝った。聞き覚えのある声に鴨原が振り向くと、そこには中学時代、ワルで有名な小山が眉間に皺を寄せて立っていた。

「あ、小山くん…」

「ゲツ鴨原！」

小山は鴨原を見てヤバイ、という顔をした。鴨原は小山と亮を交互に見比べて、そういうことが、と納得する。

「亮ちゃん、小山くんたちと？」

「あ、ウン。そうなんだ…」

「お、おい鴨原。俺は別に亮のことパシリにしていると、そんなにじゃねーからな？俺ら同じ高校だからさ、今でも仲良くしてるだけで、な、亮！」

「う、うん…」

亮は鴨原の顔を見ないようにしてそう言った。三人の間に沈黙が訪れる。

「そ、そうだ、お前ら久しぶりに会ったんだろ。積もる話もあるだろうし、しばらく話でもしてるよ、ウン。飲み物は、俺が買っとくからさ。じゃあ、俺行くからな！」

そう言つて小山はとつと何処かへ行ってしまった。彼の後姿を二人で見ながら、「ちよつと話そっか」と鴨原は亮を誘った。

近くの石段に腰かけて、二人は打ち上げられていく花火を見守った。目の前には沢山の人が立ち並んでいて、お世辞にもよく見える

場所とは言えない。それでも夜空に浮かぶ光の粒たちは、美しく輝いて見えた。

「鴨原くん、ありがとうね」

静かに、亮が呟く。

「え？」

「多分、今鴨原くんが思ってる通りだよ。僕、未だに小山くんたちの言いなりなんだ。今日だって、色んなトコ買いに走らされて、荷物とか持たされてさ……」

亮の横顔は、花火に照らされてカラフルに色を変えている。綺麗な筈なのに、それはどこか悲しそうだった。

「中学の時から、僕あんまり変わってないんだ。違うのは、鴨原くんがいないこと。あの時は鴨原くんがいつも僕の味方になって、助けてくれた……。鴨原くんと一緒にいると、小山くん僕の所に寄って来ないからさ」

フフ、と笑う彼につられて、鴨原もつい思い出し笑いをする。

「そうだね。僕が一度、小山君の意識を失わせちゃったからね」

かつて、小山から苛められる亮を庇おうと鴨原が暴力を受けた時、思わず鴨原は小山をボコボコにしまったことがある。それ以来、小山は鴨原を恐れて近寄らないのだ。

「そうそう。あの時の小山くんの顔、最高に笑えたよ。まさか、俺がコイツにやられるなんて……！って顔してた」

「亮ちゃんも僕が小山くんをやっちゃうなんて思ってたんでしょ」

鴨原が笑いながら亮を見る。

「アハハ、実はね……。だって鴨原くんって、僕と同じ……、その……」
「うん。苛められる方だったね」

「……だからさ。あんなに強いなんて、思ってたなくて。意外だった」
二人は思い返すように空を見つめた。ドン、ドン、と音の感覚が狭くなって、花火の盛り上がりがピークを迎えているようだ。

「僕は、小さいころから父さんに鍛えられていたからね。でも、こ

の力は暴力に使うんじゃないで、自分や、誰かを守るために使いなさいって、強く言われてたんだ。だからあの時は、つい体が動いちゃって」

拳を握りしめ、もう片方の手でパシッと捉える。そんな鴨原を見ながら、亮は羨ましそうに呟いた。

「あれから、僕はずっと鴨原くんに助けられっぱなしだったな…。嬉しかったけど、反面自分が惨めで仕方無かったよ。僕一人じゃ何もできなくてさ、同じような人間だと思ってた鴨原くんも、本当は凄く強くてシツカリしてて、僕とは違う人間なんだって思い知らされたから」

「亮ちゃん…」

「はは、ゴメンね、こんな話」

鴨原は言葉に詰まった。自分は亮が好きだから一緒に行動していただけなのに、亮はもつと色んな事を考えて、モヤモヤとした気持ちで自分の隣にいたんだと思うと、それに全く気付けなかった自分が恥ずかしく思えた。知らぬ間に、自分も彼を苦しめていたのかもしれない。

「僕の方こそ、ゴメン…、なんか」

「何で鴨原くんが謝るの？僕、鴨原くんがいなかったら今より最悪な人生送ってたと思うよ！あのまま苛められ続けて、それに抵抗する気力も無くなって、学校も来られなくなってたかもしれない」

亮は力いっぱい鴨原に向かって主張した。

「だから…、だからさ。僕、勝手に鴨原くんがライバルだと思ってる。僕にも、何か自分一人で出来ることがあるかもしれないって、そう思えるようになったから。いつか、もっと堂々と胸を張って歩けるようになりたいんだ」

「亮ちゃん…。でも、小山くんたちは」

「うん。今はさ、こんなんだけど…。それでも、前よりマシになったんだよ。パシられてはいるけど、暴力とかは無くなったし。だからもう逆に、コイツ根性あるなって思ってもらえるぐらい、言いな

りになってやろうかなって思ってるんだ」

「ええっ、亮ちゃん、大丈夫なの!？」

「ま、ちよつと冗談…だけど、ホントだよ。大丈夫、僕、もつと精神的に強くなれるように頑張るんだ。だから、もうただの言いなりにはならないよ」

そう言つて亮はサッパリと笑つた。

(確かに、少し雰囲気が変わつたかもな…)

鴨原はボンヤリ思つた。昔は何かある度すぐに泣きそうになつて、嫌だ嫌だ、と言うのが彼の口癖だつたのに。

「そっか、なんか亮ちゃん、頼もしくなつたなあ…。僕の方が、負けちやいそだよ」

「あはは、鴨原くんにそう言つてもらえると嬉しい」

しばらく近況なんかを話し合つていると、鴨原のポケットの中で携帯が震えだした。画面を見ると、佐竹からの着信だ。ゴメン、と一言言つて携帯に出る。

『鴨っち〜！大丈夫？トイレ遅くない？』

「ゴメンね。途中で友達に会つて話してたんだ」

『あ、なーんだ。てつきりヤンキーにでも絡まれてるのかと思つてたよ。チエツ、夏目先輩の一人勝ちだ〜』

その言葉に鴨原はヒクリと反応する。

「ちよ、ちよつと佐竹くん、それどーいうこと？もしかして、賭けてた？」

『あゝ気にしないで！じゃあゆっくり戻つておいでよ。じゃあね〜』

そう言つて一方的に電話は切れてしまった。鴨原は呆れながら、向こうの場面を想像する。

(夏目先輩は僕がヤンキーに絡まれても何とかなるの知ってるからなあ…。てゆーか桜野先輩たちも僕が絡まれる方に賭けてたのか？…、酷過ぎる！)

悲しくなる気持ちを押し殺して亮の元に向かうと、彼は少し寂しそうに、鴨原を見ていた。

「鴨原くん、良い友達が出来たんだね。良かった」

そんな亮を見ながら、鴨原も少しだけ微笑んで頷く。

「でも僕も、小山くんよりヒドイ先輩にパシられてるんだよね…。だから、お互い頑張ろう」

「はは、何ソレ。じゃあ、僕も負けてられないね!」

スッキリした気持ちで二人は笑い合った。楽しい時間が過ぎるのはあっという間だ。お互いを軽く励まし合った後、彼らは笑顔で「じゃあ!」と手を振って別れた。

17・望月君と本田君

待ちに待った夏休みが到来した途端、暑さも更に加速していった。窓を開けて涼しさを求めても、モツタリとした温い風しか入って来ない。

（それでも風が吹くだけマシなのかもな…）

部屋の窓を開けてぼんやりと読書をしながら、本田はそう思った。広い室内。窓際に置かれた革生地のリッキングチェアに腰かけて、紅茶を啜った。熱くても、彼はこうして日差しを浴びるのが好きだ。肌が焼けるのは嫌だが、一応日焼け止めクリームも塗ってあるし、日光を浴びたほうが元気になる。

「和樹、クッキーが焼けたからいらっしやい」

階下から聞こえてきた母親の声に、「はい」と小さく呟いた。本に琴を挟んで、大きく伸びをする。

（今日はケーキの気分だったけど、まあいいか）
ピルルル…

彼が降りて行こうとすると、机に置いていた携帯が鳴りだした。すぐに音が止んだので、メールだと気づく。素早くボタンを押して見てみると、『本田くんへ（ハート）』と可愛い件名がついていた。

『元気？』

本田くんさあ、葉子ちゃん気に入ってたじゃん？俺メアドゲットしちゃった〜！

欲しい？欲しい？』

（何だこのメール…）

そのメールを見て、本田は少し固まった。メールは望月からだ。彼のテンションは相変わらずである。本田でさえ、毎回それについていける自信が無かった。

（ウーン、葉子ちゃんねえ…）

葉子ちゃんとは、一週間前の花火大会で知り合った女の子だ。本田自身はナンパするつもりなんて無かったのだが、なぜか芝と望月に連れられて三人で行動するハメになってしまった。取りあえず適当に女の子に話しかけていたが、彼自身その場限りのつもりだったので、連絡先などは一切聞かなかった。

（お陰で桜野先輩とはちつとも話せなかったなあ）

フウと一息つく。再び葉子ちゃんに意識を持っていくが、薄ぼんやりとした記憶しか戻って来なかった。

（確かに、俺好みの可愛い子だったんだけどなあ。今はそんな気分にならないんだよなあ）

何と返信しようか考えていると、再び携帯が鳴り出した。今度はメールではない。

「はい？」

『あの…、本田くん？久しぶり…』

高い女の声。思わずハッと画面を確認すると、知らない番号からだ。

「えっ、と…」

『私、葉子。この前、花火大会で、一緒に話した…』

それを聞いて、本田は思わず呆れた。さっきの望月のメールは一体何だったんだ。本田の返事なんて結局お構いなしで、勝手に葉子に電話番号を教えてしまっている。

「ああ、葉子ちゃんね！久しぶり。…ノゾム先輩に、聞いたんだよね？」

『そ、そうなの。あつてもあの人のこと責めないでね、私がずっと本田くんのこと気になって…、それで無理矢理アドレス知りたいて頼んだら、教えてくれて…って、何言ってるんだろ私っ！恥ずかしい！』

彼女は突然照れて、ゴメンねを繰り返した。それを聞きながら、本田は大丈夫だよ、と思い切り猫を被って答える。

（コレは、かなりめんどくさいな）

「で、何か用だった？」

『え、用ってわけじゃないけど…。ただ、本田くんと、もつと仲良くなりたくなつて…。迷惑だった？』

「いや、嬉しいよ。そんな事言ってもらえるなんて。…ちなみに、俺のどこがいいの？ホラ、他にも二人いたじゃない」

『ええーっ。だって、本田くんが一番、綺麗だったから…。あの時ね、花火の下で見た本田くん、すごく素敵だった！誰よりも輝いて、私の事見てくれて。他の二人は、なんかちょっと違うっていうか。どこにでもいるような…』

その言葉を聞き流しながら、本田はフンと鼻を鳴らす。

（そんなこと、分かってるよ）

「そっか。でも葉子ちゃんも、とっても可愛いよ」

「ええっ」

「でも、そうだね。所詮、その程度だったかな。ありがとう、もう電話、切っていいかな？」

「え？」

「もう葉子ちゃんのこと、よく分かったから。だからもう切るね」

「え？」

「じゃあ」

ピッ、と本田は躊躇いもなく電源ボタンを押した。シンと静かな空間が訪れる。彼はそのまま携帯を力チ力チと素早く動かして、今度は望月に電話をかけた。

プルプル…

『はい』

「ノゾム先輩？ちょっと、勝手な事しないでくださいよ！」

『え？何、気に入らなかった？葉子ちゃん』

「気に入りませんね。俺そういうつもり、ないですから」

『べっつにいいじゃん？本田くん勿体ないよ！後になって後悔するよ！』

望月は全く反省もしていない風で、笑いながらそう答える。

「いいんです。俺は女の子に困ってませんから」

『ハイハイ、ホントつまないんだから。じゃあ俺がいただいちゃおっと』

「じゃあ切りますね」

『あゝちよつと待つてよ。俺さあ今超ヒマなんだよねえ。何か面白いこととかない？教えてよ』

彼の言葉に、本田はしばし真剣になつて考えてみた。面白い事…。
「ああ、お菓子作りとか、楽しいですよ。俺最近はタルト作りにハマつてて…」

『ブハッ！出た、王子様発言！つていうか想像してみてよ！俺が楽しそうに菓子作つていいの！？』

「いいと思いますよ」

『あゝ、そうじゃなくてさ…。もう、本田くんに聞くの、やっぱ止めるわ』

そう言つて望月は溜息をついた。

「そうしてください」

『はあゝ。学校に行つても夏休みだから誰もいなくてつまねえしさあ…。ああ、夏目くんとか何してんだろ』

「先輩好きですねえ」

事あるごとに夏目をからかおうとする望月に、本田は愉快的な気持ちを抑えつつ笑つた。

『だつて、なんか生意気なんだもんアイツ』

「あ、そう言えばこの前生徒会の集会があつたときに、今度部室の掃除に行くつて言つてましたね」

『え、いつよ？』

「確か来週の、火曜だったかなあ」

『マジ！？サンキュ、絶対行く！』

途端にテンションが上がる望月。その反応を聞いて、本田も妙にニヤリとしてしまった。

「どうするつもりですか？」

『別に大したことしねえよ。単にジャマするだけ』

「へえ、ノゾム先輩。楽しんで来てくださいね」

『勿論!』

そんな事で笑い合う彼らは、傍から見ればかなり危険人物だろう。けれどこの瞬間だけは、二人とも同じ気持ちで心が通じ合っている筈だ。

電話を切って、本田は小さく鼻歌を歌いながら階下へと降りて行く。香ばしいクッキーの匂いが鼻をついた。甘いバナナが幸せな世界へと連れて行ってくれる。

「和樹、紅茶入れてたのに、冷めちゃったじゃない」

「ああ、そのままで大丈夫だよ。今日は暑いからね」

入れ直そうとした母の手を止めて、本田はニツコリと微笑んだ。

彼の頭には、既に葉子ちゃん存在など後形も無く消え去っていた。

18・望月君と夏目君

ミン、ミン…。

蝉が声を張り上げて鳴いている。そこまでして存在を主張しなければならぬなんて、何だか寂しいものだ、と夏目は思った。人間ならば、誰かが何処かで自分を見てくれているのに。

学校にやって来ても、今のところ誰かとすれ違うこともない。下駄箱で上履きに履き替え、一人静かな廊下を進んだ。すると突然背後から、「夏目くん」と無駄にテンションの高い声が聞こえて来る。よりによってなぜコイツなんだ、と夏目は少しウンザリしながら、その声に気付かないフリをした。

「ちよつと、ちよつと！無視すんなってえ」

「ああ、望月くん。久しぶり、何してるの？」

「俺？俺はちよつと進路の事で先生から呼び出しくらっちゃってさあ、今帰るところ。夏目くんは？」

「部室の掃除。…下駄箱、あっちだけど」

立ち止まって夏目が指差すと、望月はその腕を下ろして夏目の背中を押した。

「まあまあ！掃除なんて、大変じゃない？俺も手伝ってあげるよー！」

そう言つて無理やり部室まで付いていく。

「珍しいね。そんな事言うなんて。つていうか、別に手伝わなくていいよ。俺一人でやるから」

「いいからいいから！俺もたまには役に立たないとねえ」

望月はサッサと掃除入れから箒と雑巾、バケツを取り出した。

「ふーん。じゃ、まず箒でゴミ集めてくれる？俺は窓とか拭いてるから」

「りょーかい」

そう言つて夏目が廊下に出て、雑巾を水で濡らしていると。

ガラガツシャン！！

派手な音が室内から響いてきた。思わず夏目は雑巾をそのままに部室の扉をバンツと開ける。

「あ、ごめーん。ロッカーにぶつかったら、一気に色んなもの落ちてきちゃってさあ……」

「いーから！！やっぱリテメエは大人しくしとけっつ！！！」

思いつきり怒鳴られて、望月はシュンツと縮こまった。

「わざとじゃないのに……」

「どっちでもいい。いてもいいから、とにかく動くな。ココに座っとけ」

教室の端っこで、椅子にムギユウツと押しつけられる。

「はい……」

言われた通り、望月は椅子に収まった。そうして反省しているフリをしながら、彼は夏目がせつせと動き回るのを優越感に浸りながら眺めていた。

「ふう……休憩」

一通り窓や床を全て拭き終わって、不要な物をゴミ袋に纏めたところで、夏目は椅子に腰かける。

「わーい。休憩」

「望月くん、コーヒー」

「ええっ、何で俺が……!?」

「じゃあ帰れ」

「……ちえー」

望月は洪々、飲み物が常備されている小型の箱からインスタントコーヒーを取り出し、紙コップに振り分けた。電気ケトルで沸かしたお湯を、ゆっくりと注ぐ。

「ちゃんと出来るじゃねーか」

「フン。…ねえ、ミルクとかないわけ？あと砂糖とかさあ」

「ない」

「えー、そのままかよ…。しょうがねえな」

二人でゆつくりと熱いコーヒーを口に入れた。紙コップでは雰囲気が出ないが、少しは落ち着いた気持ちになれる。

「そういえば夏目くん、何で一人で掃除なんかしてるの？いつもみたいに鴨原くん使えばいいじゃん」

苦そうに顔を歪めながら、望月が聞いた。夏目は彼の顔を見ずに、コーヒーを啜る。

「たまにはな。どーせ俺、二学期になったらろくに部活来れねえし。夏休み中に片づけとけば、アイツも楽だろ」

「へえ」。意外と、優しいじゃん？普段あんな感じの癖にさあ」

ニヤニヤ笑いながら、望月は目を細めて夏目を見た。

「ま、その方が俺のありがたみが分かるってもんだろ」

「ププツ、かわい」

からかう望月を、ギロリと夏目は睨み返した。それでも彼はまだ笑顔のままだ。

「なんかさあ、俺、今ホント暇なんだよねえ。ココ最近真面目に学校行くようにしてたからさあ、今までつるんでた奴らとも会わなくなってきたし。何していいのか、全然分かんなくてさあ」

教室の天井を見つめながら、ダラツと彼は呟く。

「この前の花火大会でもさあ、せっかくだから色々と遊んでやろうと思ってたのに、俺全然女の子に相手されないんだよね。まあこんなだからしょーがねえけどさあ。だから本田くん連れて行ったのに、女の子は本田くんしか食いつかないの。酷くねえ!？」

「当然だろ。っていうか、カズに食いつく時点でどうかとも思うけど」

アッサリと言われた。

「ハッ、モテる奴は言う事が違うねえ」。正統派イケメンって、俺らの敵だよ。ちよつと崩れた、俺みたいな奴の方がさあ、絶対に飽

きないし、味があると思うんだけどなあ」

「何だそれ」

ハハ、と夏目が軽く笑う。その顔を見て、望月はパアッと表情を明るくさせた。

「あーっ、初めて笑った！俺の話で！何か超嬉しー！」

「ハア？笑ってねえよ」

途端に険しい顔に戻る。それでも望月はムフフと笑いながら、椅子のままガコガコと夏目に近寄って来た。

「もー何なの？ツンデレ？どっちでもいいけど、とにかくいいモノ見たって感じー！ああきつと、アンタ好きになる女の子って、こんな気持ちになるんだろうなあ」

「気持ち悪いよ」

しみじみと言う望月に、一步引いて夏目が呟く。

「フフ。俺にそんな事言っているの？…なあ、この間の花火大会と一緒に来てた彼女、可愛かったよね！誰だっけ？えっと…」

「…綾乃さん？」

「そう、綾乃さん！超癒し系な感じじゃん！ふわっとしててさあ、女らしくて、いーよなあ」

そう言っただけについて笑う望月に、夏目は嫌な予感がした。

「何が言いたいのだよ」

「俺、狙っちゃおっかな。年も同じだし、頑張れば話も合うかも…」

「綾乃さん、桜野先輩と付き合ってるよ」

何故か、そう言ってしまった。完璧な嘘、というわけではないのだが、それでも夏目は、望月の前で本当の事を言う気にはなれなかった。

少し間が空いて。

「だから？」

ニヤリ、と彼は笑う。

「可愛いよねえ、夏目くん」

明らかに夏目の反応を窺っている望月に、思わず夏目は怒鳴りそうになった。それを必死で堪えようと、冷め始めたコーヒーを口に含む。

「ねえ、掃除まだ続けるの？」

「……いや。残りは明日に回す」

「ふーん。そっか」

「明日も来る気か？」

強い視線を投げかける夏目に、「明日は行かないよ」とニッコリ笑って望月は席を立った。

「今日は楽しめたよ、ありがとう。じゃあね」

飲みかけのコーヒーを置いて、彼は教室を出て行った。廊下から、小さく靴後が響く。その音が聞こえなくなるころ、ビュウツと強い風が吹いて、開け放していたドアがバタン！と閉まった。

19・彼と彼女

翌日も、夏目は一人黙々と部室の片付けを進めていた。今日はそれほどすることは無いのだが、これまで作ってきた新聞をファイルにきちんと纏め直して、見やすい場所に飾っておこうと思ったのだ。「あちい」

教室に冷房などは付いていなかった。開け放した窓からは、一向に風が入って来ない。ただジンワリとした熱が室内にゆっくり侵入してきて、汗を出させるだけ。

グラウンドからは野球部の掛け声、隣校舎の音楽室からは吹奏楽部の合奏が響いてくる。あとは煩く喚き立てる蝉の声、加えて太陽から放たれる熱は、本当にジリジリと擬音が聞こえてきそうほどの強い力を持っていた。

少しして、パタ、パタ、とスリッパで廊下を歩く音が聞こえてくる。珍しい…誰か来たのだろうかと思いつつ、夏目はファイルを捲る手を止めずに新聞を挟んだ。

コンコン。

ハッと顔を上げると、同時にドアがガチャリと開く。

「マサ！お疲れ」

綾乃がいた。青いブラウスに、白いスカート。彼女はこのとてつもなく熱い中、汗一つかかずに笑顔でそこに立っている。

「どうして…」

「何かね、望月くん？から連絡が来て。マサが一人で頑張ってるんだって。だから手伝ってあげて…だってさ。偉いじゃない！」

夏目は思わず眉を寄せた。

「ったく…、アイツ、どういっつもりだよ」

「案外優しいんだね、彼も。マサの事、きっと心配だったんじゃないかな」

「それはないですよ」

即答。綾乃はクスリと笑って、部室を見回した。

「でも、凄く片付いてるじゃない？この前来た時とは大違い！手伝おうと思っただけ、あんまりすることないかもね？」

「ああ、綾乃さんは何もしなくていいですよ。あとコレを纏めて、片づけるだけですから」

「ほんと？何だあ、もつと早く来れば良かったかなあ。じゃ、私冷たいジュースとシュークリーム買ってきたから、準備してるね」

「あ…、ありがとうございます」

「いーのいーの、と綾乃は笑って、紙袋からアップルジュースを取り出した。紙コップに注いで、シュークリームの箱を開く。

「美味しそうですね」

「でしょ。コレ、テレビで紹介してたやつ！私も食べたかったんだよねえ」

彼女のニコニコと笑う顔を見ると、突っ込む気も失せてしまった。

「よし、これでいいか」

分厚くなったファイルをドサツと閉じる。夏目はシュークリームに手を伸ばして、いただきます、と呟いた。

「どーぞ！」

二人でシュークリームを頬張る。

「うん、美味い」

「ね！甘いけど、結構食べれちゃうなあ」

モグモグと口を動かしながら、綾乃は机に置かれていたファイルを手に取った。

「わあ、懐かしい！これ、私たちが作った時のやつ！」

綾乃が嬉しそうに新聞を指差している。

「懐かしいっていつても、半年前までいたじゃないですか」

「そうなのよねえ。でも凄く、昔の感じがする…。あ、マサと本田くんのツーショットだ」

新しい記事を見ても、綾乃は楽しそうに笑っていた。しばらく二人でファイルに纏められた新聞を見ながら、こんな出来事もあった、

あんな記事も作った、と懐かしい昔話を続けた。

「マサが生徒会長になった理由、この学校が大好きだから、だってフフ、これどうせ嘘でしょ」

「バレました？」

「当たり前じゃない！何年マサのこと見てると思ってるのよ」

笑いながら、夏目は綾乃をジッと見つめた。その視線に気づいて、綾乃も顔を上げる。

「どうしたの？」

「何でだと思います？」

「え？」

「俺が生徒会長になったの、何でだと思います？」

その問いに、視線を上に向けながら綾乃が考える。

「うーん。何か格好いいから？一番になれるし」

「まあ、そうですね」

「やっぱいい？」

「あとは、桜野先輩に負けなかったためですね」

ピクリと、綾乃の瞳が少しだけ揺れた。それに気付きながら、夏目は残りのジュースを飲み干す。

「透哉？」

「そうです。綾乃さんが、あの人がっかり見てるから。少しでも桜野先輩を超えられるようにって、俺はやりたくもない生徒会長なんて仕事、やってるんですよ」

夏目の瞳はただ真っ直ぐ、綾乃だけを捉えていた。その姿は、彼の言葉が決して冗談などではなく、本心から告げているのだという事を伝えている。

「マサ、それって…」

「分かりますよね。俺、一年前に言ったじゃないですか。綾乃さんが認めるような男になるって。だから今、もう一度教えてください。俺のこと、どう思ってるのか」

綾乃は黙ったまま、夏目から顔を逸らした。どういう風に話せば

いいのか、慎重に考えるように、視線をゆつくりと一周させる。

「…マサ、ごめん。私、前にも言ったけど、マサの事…そんな風に思えない。嫌いじゃないけど、何て言うんだろ…。やっぱり、そういうんじゃないっていうか…」

彼女は明らかにうろたえていた。そんな綾乃に考える隙を与えないように、夏目は素早く問いかける。

「綾乃さん。それ、ちゃんと俺の事考えて言ってるんですか？去年は桜野先輩がいましたけど、今は何も無いんですよね？だったらもつと…」

「考えてる！ちゃんと考えてるよ…！確かに、私と透哉はもう付き合って無いよ。でもこの前言ったじゃない…、私、透哉のこと、まだ好きなの。だから、マサの事は…」

夏目はずっと綾乃の顔から視線を逸らさないのに、綾乃は決して彼の顔を見ようとはしなかった。それが、夏目には悔しくて仕方なかった。

「俺のことは、好きになる可能性もないって？」

「…そんな言い方しないですよ…」

「ハッキリ言ってくれないと、俺どうしたらいいのか分からないですよ。ちゃんと、言ってください」

「お願いマサ、意地悪言わないで…」

綾乃の顔がどんどん俯いていくのを、夏目はイライラした気持ちで眺めていた。

「じゃあ…、キスしてくださいよ」

ハッと綾乃が顔を上げる。その瞳は潤んでいて、今にも雫が落ちてきそうだった。

「諦めますから。最後にキスしてください」

いつかそんなことを言われた記憶がある。言われるととても困るのに、夏目は壊れそうな綾乃を見ていると、自分も同じように彼女を困らせたかった。

「マサ…、本気？」

「本気ですよ」

一度言っただけには、もう撤回出来ない。ゆっくりと綾乃が近づいてきて、夏目の肩に手を置いた。目の前に、泣きそうな瞳がある。ジッと見つめると、彼女は困ったように瞳を閉じて、顔を近づけた。唇が、触れる。

本当に軽く、触れただけだった。たった五秒程で。短い筈なのに、とても長い。

目を開けた綾乃は、目の前の瞳が開かれたままである事に戸惑う。

「マサ…」

「綾乃さんは、するんですね」

夏目が無表情で彼女を見つめ、時間が止まったように二人は固まった。

「綾乃さん、分かってねえ。気持ちの無いキスをされるのが、どれだけ辛い事なのか、分かってないよ」

ハツとして、綾乃は夏目から離れた。立ち上がったまま、足元に視線を落とす。

「ごめ…」

椅子に掛けられていたカバンを取って、彼女は「帰るね」と、本当に小さな声で呟いた。そのまま夏目の方を見ずに、入口へと背を向ける。

「好きだよ!!」

その背中に、夏目は叫んだ。ピクリ、と肩が動いて、綾乃が立ち止まる。

「どうしてそれを認めてくれねえんだよ！何で綾乃は俺を見ようと思しねえんだ…！なんで…」

綾乃の肩が震えていた。泣いている…頭ではきちんと理解しているのに、夏目はそんな彼女に向かって思い切り叫んだ。

「そうやって俺んとこフラフラ来て、期待させるようなことすんじやねえよ！ふざけんじゃねえっ!!」

言い終わらないうちに、綾乃はドアを開けて教室を出て行った。

ボタンツと大きな音を立てて閉まるドアに向かって、夏目は「クソッ」と呟く。

机の上のアップルジュース、シークリームが入っていた空箱、そして分厚いファイルまでもが、虚しくそこに存在して見えた。蝉の鳴き声は相変わらず煩くて、彼の気持ちを沸騰させるのに十分だ。

椅子に座りこんで、夏目は大きく溜息をついた。我慢できなかった。これまでの彼女の態度、そして自分の情けなさ。こんな風だからダメなんだ、と自分に言い聞かせるが、今更という気持ちが押し返してきて、全てに無気力な気持ちになる。

そのまま一人、彼は静かな空間で自分を持て余していた。

20・二人の関係

良い後輩でいること。

夏目にとつて、それが綾乃の近くにいられる条件だった。

出会った時から彼女は桜野に夢中で、彼の入る隙は少しも無かった。桜野が新聞部だからという理由で、綾乃に無理やり一緒に入らされた部活も、夏目には決して居心地のいいモノとは言えなかった。しばらくして綾乃のアプローチが功を奏したのか、彼女の思いは実り、無事に桜野と付き合うようになった。綾乃がこれまで見せた事のない笑顔で嬉しそうにそれを報告するのを、夏目は千切れそうな思いで聞いていた。八つ当たりしそうな自分を何とか堪えた記憶がある。仕方がない、と自分の中で無理やり納得させることしかできなかった。

（そんなのは、覚悟していたことだ）

彼女の近くにしていると決めた時から、そう心に決めていた筈なのに、実際は違った。全く冷静ではいられない…。我慢できなくなった一年ほど前、夏目は自分の気持ちを彼女に伝えた。

「ゴメン、マサ。私には、透哉がいるから…」

それで終わりだ。彼女の本心を聞く事も無く、それだけで結論が出された。けれど理由なんて、それで十分だったのだろっ、その時は。

ブーブー。

『マサ、この間はゴメンなさい。このままじゃ嫌だから…、私ちゃんと話したい。一日だけ、時間もらえるかな？』

綾乃からのメールを眺めながら、彼は返信を躊躇った。本当はすぐにでも、分かった、と伝えたいのに、その先の事を考えると急に指が止まった。

（会ったら、きつともう、そこで…）

頭の中の雑念を振り払い、彼はメールを打つ。素早く携帯を閉じ

て、机に放り投げた。

ブーブー。

携帯の音だけが、虚しく室内に響いている。

強い日差しの下、二人はぎこちない笑顔で再会した。

「マサ、疲れてる？」

「ああ…、毎日、予備校があるので」

夏目の顔を窺いながら、綾乃が心配そうな顔をする。

「今日も授業、あるんだっけ」

「はい。夕方から…」

「そっか。…じゃあ、あんまり時間、取らせないから」

綾乃はそう言つて、彼らが待ち合わせをした図書館の南に位置する中央広場を指差した。

「あそこで、話しようか。人もそんな多くないから、ゆっくり話せると思う」

夏目はそれに小さく頷いた。五分ほどの距離を、二人は足並みを揃えながら静かに歩く。通り過ぎる人々は皆、何気ない会話をしながら笑い合っていた。偶然目が合う通行人たちを眺めながら、彼らから見て自分たちは一体どのように映っているのだろうな…と夏目は思った。

中央広場といっても特に何かがあるわけではなく、中心に大きな噴水がドンツと置かれていただけのスポットだ。その周りで待ち合わせをしている人たちもいれば、ただ単に突っ立って煙草を吸ったり読書したりしている人もいる。要するに何でもアリという、かなり自由な空間だった。

その中心から離れた木陰にいくつかベンチが置かれてあり、二人は人が周りにいないベンチを選んで隣り合わせに腰掛けた。すぐ後ろに大きな木が背を伸ばしている。お陰で辛うじて日差しが直接肌

に届くことはなかったが、それでもただ座っていると体からどんな汗が噴き出してきた。

「ふう、暑い、ね」

綾乃がカバンから薄いピンクのハンカチを取り出して、額の汗を拭った。しばらく黙って目の前の走り回る子供たちを眺めた。一人の子どもが噴水の中に飛び込もうとしているのを、母親らしき女性が叱りながら止めている。

「マサ…、この前は、本当にゴメンね」

膝の上に置かれたハンカチを見つめながら、綾乃がポツリと呟いた。

「なんで、綾乃さんが謝るんですか？俺の方こそ、突然怒鳴ってしまっ…、謝らなきゃならないのに」

それでも、夏目は自分から謝る事が出来なかった。自分の非を認めてしまうと、彼女への思い全てが間違っていたことになりそうだった。

「マサは、悪くないよ。…私がずっと、マサに甘えてただけ。ずっと、弱くて、マサから逃げてた。気持ち、気づいてたのに、気付かないフリして…」

蝉の声が煩い。小さく呟く綾乃の言葉はその中にかき消されてしまいうさだ。それでも何とか聞き逃すまいと、夏目は黙って聞いていた。

「私、本当に最悪な女なんだよね！…そう、マサの気持ち分かかって、利用してた。透哉のこと、すごく好きなのに、ちっとも信用できなくて。そんな自分が嫌で、透哉に迷惑かけたくなくて、別れたのに…。それでもまだ、私醜いまま。透哉に会ったたびに好きだって言いそうになった。なのにまた付き合う勇気もなくて、ダラダラ気持ちだけ引っ張って…。私だけこんな、嫌だったから…」

震える声、ハンカチを握りしめる手が強くなる。

その先の言葉を聞きたくないのに、夏目は彼女の発言を止めることも出来なかった。

「マサは私のこと好きでいてくれるって、心のどこかで安心してたんだ。こうやって私がマサと仲良くして、透哉を嫉妬させようとしても…、それをマサは許してくれるような気がしてた。そんなハズ無いのにね…。だからこの前、マサに怒られて、目が覚めたの。私…、すっかりしなきゃって」

綾乃が顔を上げる。横顔に視線を感じたが、夏目は真正面を向いたまま、わざと目を会わせないようにした。

「だから、私、透哉にもう一回気持ち伝えてみる。もうこんな風に中途半端に付き合うんじゃないくて、ちゃんと覚悟も決めて…。結果がどうなるかなんて分からないけど、そうした方が、今のままより絶対いいだろうなって思うから」

「そう、ですか」

「だから、マサにも言うね」

ハツと夏目が綾乃を見返した。二人の視線が絡まる…彼女は弱々しい瞳を向けつつ、それでも夏目をしっかりと捉えていた。

「私、マサと付き合うことは、ない。これから…、ずっと」

「……」

「ゴメンね」

二人はしばらく顔を見合せたまま、動かなかった。

「絶対、ですか」

「…うん」

「そんなの、分からないですよ。桜野先輩に断られたら、今度は俺に興味持つかも…」

「そのときは、そのとき。もう、マサに頼ったりは、しないよ」

口を開きかけて、ああ、もう駄目だな、と心の中で悟った。彼女の強い意志を持った瞳を見るだけで、それはもう十分理解できた。

「ありがとう、マサ。マサは、私のことなんか気にしないで、自分らしく生きてね。誰かのために何かをするんじゃないくて、もっと自分のやりたいことを…大切にしてくね」

そう言って綾乃は立ち上がった。ここから見上げると、彼女は意

外と背が高かった。今まで気付かなかった、ずっと隣で歩いていたのに。

「じゃあ、行くね。勉強も、頑張つてね。私はマサのこと、ずっと応援してるから」

じゃあね、と小さく笑つて、彼女はヒールを鳴らしながら中央広場を通り抜けて行つた。その後ろ姿が小さくなり、消えて姿が見えなくなってしまうまで、夏目はずっと彼女を見つめていた。頭の中で、沢山の綾乃の言葉が次々に浮かんでぼんやりと消えて行く。それからもう何も浮かばなくなって、夏目は静かに目を閉じた。

彼女の顔が浮かんだ。どれくらい時間が経つても、それが消えることは無かった。

21・夏目君と桜野先輩

冷房の効いた書店の二階。ビジネス本や専門書が並ぶフロアの隣は、大学入試の参考書やセンター試験の過去問等が並んだエリアへ繋がっている。そこではワイワイと一際大きな声を上げて、女子高生らしき二人組が物珍しそうに東大の赤本を眺めていた。

その少し奥で、難しい顔をして夏目が数学？の問題集と睨めっこしている。その姿を見つけた桜野は、少し微笑んでゆっくり彼に近づいた。

「立ったまま、問題解いてるのか？」

後ろから話しかけると、彼はビクツと肩を揺らして、驚いた顔で振り返った。

「先輩…、何してるんですか」

「いやあ、ちよつと本見に來ただけどき、懐かしくなつて受験用のコーナー覗いたんだ。そしたら、お前が」

ニツコリと笑つて、桜野は夏目の肩越しに問題集を覗き見た。

「うわー、俺、もう駄目だな。絶対こんなの解けない。そもそも俺、理系じゃないしなあ」

顔をしかめて、桜野はハー、と声を漏らした。そんな彼を無視して、夏目はボタンと本を閉じる。

「アレ、買わないの」

「今日はちよつと、下見に來ただけですから」

そう言つて夏目は本棚から離れ、スタスタとフロアを進んでいく。階段を下りると、夏目はそのまま書店を出て行ってしまった。そんな彼を桜野も少し遅れて追いかける。

「オイ、夏目っ」

桜野の声に構わず、夏目はどんどんと先を歩いて行く。外に出ると、途端に太陽の光が彼を貫いて思わず目が眩んだ。光の中に埋もれて行く夏目を何とか確認しながら、桜野はその後を小走りに辿っ

た。

「夏目、ちょっと待てよ！」

「…何ですか」

腕を掴むと、やっと夏目は立ち止まった。それでも体の向きはそのまま、顔だけが少し後ろを向いただけだ。

「何じゃないだろ。そんなにさつさと歩いて行つて。…気に入らない事があるなら、ちゃんとやってくれよ」

そう言いながら桜野は、彼が自分を無視するのはきつと綾乃のせいなのだろう、と推測する。

「何でもありませんよ。俺、今から予備校なので。失礼します」

再び前を向いて進もうとした夏目の腕を、桜野はグツと力を込めて握った。

「いいから。ちょっと聞けよ。…くれぐれも、怒るなよ」

前を向いたまま、夏目は渋々といった様子で立ち止まる。

「…早くしてください」

「俺ら、また付き合うことになったよ」

夏目は何も言わない。桜野は彼の腕を離して、ゆっくりとその前に立った。

「悪いな。こんなことお前に言うの、どうかと思っただけだ。…でも、言うておくべきだと思つて。どうせ綾乃からお前には何も言わないだろうし、それにこのこと知らないまま、お前がずっと、あいつのことと思ひ続けるのも良くないと思つたしな」

その穏やかな声とは反対に、夏目はキツと鋭い視線で桜野を睨んだ。

「そういうこと言われると…、余計に腹が立つて、分かりませんか。俺のことは放つといってくださいよ…！関係無いじゃないですか、そんなこと…」

「関係なくないよ。俺と綾乃の間に、お前がいるってことが、俺にとっては怖いんだ。だからちゃんと、ハッキリさせておかないと」

「もうハッキリしてますよ！先輩、分かっているんですよ？俺の立

場……」

長い間、綾乃に片思いをし続けていたこと。二回も気持ちを伝えたのに、それでも結局桜野にはかなわなかった。

「分かってるよ。……それでも、お前は綾乃のこと好きでいるんだろうなって。俺はそんな気がするんだよ。俺はお前の事も、ずっと見てたからさ」

夏目に初めて会った時、態度で分かった。彼が綾乃を好きだということ。直接聞いたことは無かったが、それはきつと、近くで見ている者ならば誰もが気付く事ができたと思う。今でも夏目はあの時と同じ目で桜野を睨んでいた。だから多分彼はまだ、綾乃のことを想っている。

「どうしたら、いいんですか。そんな直ぐに吹っ切れて言うんですか。……俺は、先輩みたいに大人じゃないんですよ。アンタみたいに、余裕で誰かを待っていることなんて、出来ない……」

綾乃と別れてから再び付き合うようになるまで、その間の桜野の態度は決して焦りや嫉妬を感じさせなかった。ただいつでもそこにいて、安心してその場に戻る事ができるように、落ち着いた包容力を与えていた。

「大人じゃないよ、俺も。心配だったから、ずっと綾乃の傍にいいうと思っただ。……だから夏目、お前にもこうして言うておきたかった。もう、綾乃のことは忘れて欲しいって」

通り過ぎる人々は、彼らの存在など全く気にすることなく歩いていく。暑い日差しの中、二人は汗をかくことも忘れてそこに立つていた。二人がこんなに真剣に向かい合って、何か話をするのは初めてのことだった。

「夏目、俺よくさ、お前と似てるなって思うんだ。趣味とか、考え方とか、態度とか。……お前を見てると、自分を見てみたい気がする。……だけど本当は、全然違うんだよな。お前は凄く、ストレートな奴だなんて思うよ。そういうところが、羨ましい」

「……嫌味ですか」

夏目がそう言うと、桜野はハハ、と笑って彼を見た。

「違うよ。でも、本当にそう思う。そこがお前の良い所なんだよな。あいつも、言ってた」

「……」

「悪かったな、引きとめて。それだけ言いたかったんだ。時間、大丈夫か？」

腕時計を見て、桜野が尋ねた。夏目も時計を見ながら、大丈夫です、と答える。

「これから忙しくなるだろうけど、体には気をつけるよ」

「先輩こそ。…また、フラれないように頑張ってくださいね」

彼はそう言っていると、桜野の返事も聞かずにさっさと通りを歩いて行ってしまった。そんな夏目を見ながら、桜野は「憎らしい奴」と小さく呟いて彼の後姿を見送った。

22・秋の風

九月に入り、学校は二学期に突入した。それでも暑さは全く衰えを知らず、相変わらず太陽の強い熱が地上を照りつけていた。

初日と言う事もあり、その日は午前中ですぐに生徒たちが校外へと溢れ出した。彼らは楽しそうに夏休みの出来事を語り合ったり、これから始まる学校の日々を憂いたりしていた。そのざわめきの中、夏目は一人グラウンドを突っ切って、人気の少ない裏門を目指す。

「あつ、夏目く〜ん！」

聞き覚えのある声に、嫌な予感がして夏目は思わず眉間に皺を寄せた。振り返る間もなく、彼の背中にドンツと体当たりして、望月が嬉しそうに抱きついてくる。

「イテッ」

「久しぶり〜！また夏目くんに会えるようになるなんて、学校が楽しすぎるね」

夏休みのブランクを感じさせないぐらい、望月は相変わらずのテンションだった。ニヤニヤと夏目の目の前に回り込んで、ズイツと顔を近づける。

「ねえねえ。夏目くんは夏休み、何してたの？」

「あ？何って、勉強よ……」

「言っとくけど勉強以外だよ！何か楽しい事、あったんじゃないのぉ？」

「……ねえよ」

望月が何を聞いたがっているのかは分かっていた。一番最後に会った時の望月の態度、彼は明らかに、夏目の気持ちを知っている。

「そんなに突き放さなくてもいいじゃん？俺だって一応、夏目くんに貢献してあげたつもりなんだけどさあ。ね……綾乃サンと、良い感じになったんじゃないの〜？」

遠慮を知らないとはこのことだ。望月はもう少し気を使って、人

と話をすることができないのだろうか。夏目はウンザリと彼を見返した。

「…ああ、お前のお陰でな」

「でしょっ!？」

「キツパリ、振られたよ」

その瞬間、望月の両目が面白いくらいにパチクリと見開かれて、元々真ん丸であつた瞳が更にギョロツと動いた。

「…ええっ!？」

彼の大きな声に、通り過ぎる数人がグルリとこちらを振り返る。ただでさえ夏目と望月が一緒にいると不自然で目立つのだが、今ではあからさまに興味津々な顔で見返してくる人もいた。

「うるさいなあ…」

「だ、だ、だつて!そんなこと聞いてねえよ!？」

「望月くんに言う必要ねえもん」

「なんだよ!マジかよ!それ、もうちよつと詳しく聞かせてよ…、
どういう状況で、とかさあ」

望月がやたらがつついて来たところで、第一校舎から歩いて来た本田と佐竹が二人の姿を発見して立ち止まった。

「アツ夏目さん!こんにちは!」

「あれ、先輩元気ないですねえ」

二人は全く正反対な笑顔で、こちらに近寄つて来る。

「本田くん…、それはしょうがないよ。夏目くんは今失恋の痛手を負つて深く傷ついているんだ…」

余計な事を、と言う顔で夏目が望月を睨み返す。そんな夏目の態度に、え、ウソ、ほんと?と二人が口々に言葉を発した。

「ホントホント」。意外だよねえ。夏目くんみたいなイケメンが女の子から振られるなんて、全然想像出来ないよねえ!」

望月は本当に嬉しそうな笑顔で、夏目の肩を抱き寄せる。

「放せよ!」

「あーあー、そんなに強がっちゃって。痛々しいなあ…。でもみんな

な！今日だけはそんな夏目くんの我儘を許してあげよう！ね！」

「僕はいつでもウエルカムですよ」

「先輩も色々あるんですね…。スミマセン。世の中、素直になれない人だっているのに…」

ワイワイと好き勝手に話しだす彼らを前に、夏目は望月に肩を抱かれたままガツクリと頭を抱えた。

「ハア…」

「夏目先輩…！」

遠くから聞こえてくる後輩の声。大きな足音とともに、鴨原がハアハアと息を切らしながら四人のもとに駆け寄って来た。

「また一人いらん奴が…」

ボソリと呟いた夏目の小言は、シツカリと鴨原の耳に入る。思わず彼は「ちよつと、それどういう事ですか！」と叫びそうになったが、すんでの所で口を噤んだ。

「ム…、それはいいとして…、先輩！ありがとうございます！部屋すつごく綺麗になってるじゃないですか！先輩が掃除してくれたんですよね！？」

「ああ…、そういえばそんなことしたような…」

「あつそれ俺もねえっ…フガッ」

彼の言葉を予想してか、夏目は即座に望月の口を塞ぐ。フガフガしている望月を無視して、夏目は思いつきり手に力を入れた。

「ムゲグ…」

「せつかく片づけたんだからな。これからは定期的に掃除しろよ」

「ハイッ！」

鴨原が笑顔で返事をする。

「さっすが夏目さん！気が利きますね」

「…ま、俺がやらなきゃ誰もしねーだろうから…」

そう言つて望月から手を離して、夏目はスタスタと裏門に向かって歩いていく。残りの四人は顔を見合わせて、そんな彼の照れ隠しをニヤニヤと楽しんだ。

「よしつ、帰るぞ〜！」

四人は走った。

望月が再び夏目にタツクルすると、今にも怒鳴りそうな夏目の顔を見ながら本田がアハハッと笑い声を上げる。佐竹と鴨原は彼の怒りの巻き添えを食らわないように、少し間を置いてその後続いた。「てめー、いい加減にしろよ」

「夏目くん、怒っちゃダメ！みんな見てるよ！」

自分の元にそろそろとやって来る四人を、夏目は不思議な気持ちで眺めていた。そんな彼の心の中では、

（しょうがねえし、卒業するまでコイツラと付き合っただけでいいかなあ……）

といった感情が曖昧ながらも浮かんでいた。

そんな気持ちになった事は今まで一度たりとも無い。夏目にとって、彼らが自分の周りにいることなどは全く興味も無い事で、ただ当然のように存在を認識していただけだったからだ。けれど今はそうではなくて、彼らが自分の所に集まって、こうして話しかけてくれること。本当はそれがとても貴重なことのように思える。

（傍にいてほしくても、いてくれない人だっているのだから）

五人はそろそろと歩きながら、学校の門をくぐった。校外に出て、同じ制服姿の生徒たちが大勢その場を歩いている。直ぐに五人誰もが周りに溶け込んで、区別がつかなくなった。

誰も特別ななんかじゃない、どこにでもいる少年たち。

暑い空気の中、一筋の冷たい風が彼らの間を通り抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6819q/>

Baby Apple

2011年9月24日03時15分発行